

# 遺跡検証によるアメニティ空間

－ヴェトナムの文化遺産を中心として－

上智大学嘱託講師

荒樋久雄

## 1. 調査目的

遺跡を取り扱った従前の研究では、建築学的、考古学的、歴史的な点に研究の焦点が限定されていたがゆえ、研究論文の内容は、遺跡の建築的、建築史的、歴史的、図像学的で、遺跡を単体的に捉えた記述にのみの、いわゆる「技法史研究」に収斂されていた。しかしながら、遺跡をただ単に、建築、図像等、有形的に捕らえるのではなく、その歴史的形成過程、発展過程、伝承過程を捕らえることが遺跡を文化遺産として取り扱うには、必要不可欠で、遺跡のみならず、遺跡を取り囲む周辺環境への視座の拡大がなくてはならない。また、そういう姿勢が文化遺産の保存と、その必要性を考慮してゆく上で重要であるといえる。

本調査では、アンコール遺跡との比較検討で、隣国ヴェトナムの文化遺産を、建物のみならず、建物を取り巻く周辺環境をも捕らえることを目的とし、短期間ではあったが、ヴェトナム中部から南部に位置する文化遺産の調査を行った。また、実際の修復現場を見学する機会には恵まれなかったが、既に修復の行われている建物を通して、その修復技法に関しても一考した。

調査地は主にヴェトナムにおける世界遺産に指定されている、(1) 霊廟建築群のフエ (Hue)、(2) 伝統的町並みのホイアン (Hoi An)、(3) ミー・ソン (Mi Son) からニャ・チャン (Nha Trang) までの間に所在するチャンパ遺跡の3つの異なる文化遺産を対象とした。

今回の調査は、非常に短期な訪問で、かつ、はじめてのヴェトナム文化遺産調査で、いわば、今後の調査の為の予備調査的な側面がつよい。従って今回の調査では、結論的な点を指摘するというよりはむしろ、今後のヴェトナム文化遺産の研究課題を列挙し、以後のヴェトナム文化遺産研究をとりおこなう上での試金石とした。

## 2. フエ (Hue)、霊廟建築群

### 1) フエの歴史的・地理的背景

フエは長建なヴェトナムの細長い地形のちょうど中心部に位置し、国内を平定した阮福映 (グエン・フォック・アイン、初代皇帝、嘉隆 (ザーロン)) が 1802 年に間創した阮王朝の古都で、1945 年、阮朝が崩壊するまで 150 年近く、その王都として機能する。中国の紫禁城を模して建造されたとされる阮朝王宮は、長く続いた戦争 (抗仏戦争、ヴェトナム戦争) により破却され、殆どの建物を逸する。他方、150 年近くに及んだ阮朝は、13 代の皇帝により継承され、各皇帝は、フオン川の河岸に、各々の霊廟を建築した。現在、ザーロン (嘉隆) 帝廟 (初代)、ミンマン (明命) 帝廟 (2 代)、ティエウティ (紹治) 帝廟 (3 代)、トゥドウック (嗣徳) 帝廟 (4 代)、ヅクドク (育徳) 帝廟 (5 代)、ドンカイン (同慶) 帝廟 (9 代)、カイディン (啓定) 帝廟 (12 代) などの霊廟が各所に残されている。また、フエのこれらの歴史的建造物は、1993 年、ヴェトナム最初の世界遺産として登録された。

## 2) フェの歴史的建造物

### 2-1.グエン（阮）朝王宮

チヤンティエン橋を渡ると、そこには王宮がある。橋を渡るとすぐに、建物の影から王宮の城壁が見える。王宮内へ入る為、進路を左にとり、城壁をくぐる門の1つへと至る。門の正面には、漆喰塗りの額の中に漢字が刻まれている。ちょっと、読み取りにくいだが、「○○○東南門」と書かれている様にも読み取れる。それにしても、日本人にとって中国語圏というのは、有難い。こんな日本より直線距離にし 4000 km 近くはなれた地に到来してなお、「漢字」という共通の文字を通して表示される言葉の意味が理解出来る事に、同じ文明圏に帰属しているという、何がしかの連帯感を感じる。

門はレンガ造りの非常に簡素な建物で、間口約 2.5m、高さ約 4 m のアーチの開口部が建物中心部を貫く。アーチは真性アーチで、レンガ造りであるにも係わらず、再度、その上に漆喰を施し、レンガの図柄を描き施す。また、正面より、1 m 強入ったところには、木造の扉を吊りこむ為の懐を設ける。扉を吊りこむ扉軸、ならびに、扉を閉める門（かんぬき）を落としこむ為の受け口は石造で出来ている。

#### 午門（Cua Ngo Mon）

この門を出て左へ進むと、周壁に囲まれた王宮へ至る。正方形をした四周を環濠に囲まれた王宮には、3カ所の入り口があり、そのうち午門（Cua Ngo Mon）は、王宮正面の門で、1833年に建立され皇帝の外出時にしか用いられなかったとされる。午門は王宮の正門で、Hueの王宮に残された数少ない当初の建物といえ、そのなかにおいても代表的な建築である事はいうまでもない。建物は、レンガ造の基段部分と、その上に重層の木造の建物の部分より成り、両者はコの字型をした平面を取る。この基段部には、5つの門が穿たれているが、中央の3つの門は、高さを確保するために、上部をレンガ造のアーチとはせず、厚さ 20cm 程の重厚な銅板を敷き詰める事により、上部の木造建物の荷重を支えるという、おそらくこの門独特の技法をとる。この敷板全てが銅板であるならばその重量のみならず、材料費的にもかなり高価な仕様となる。また、中心部の3カ所の入り口には、表面と内部に、板石（安山岩？）を張り、両脇間の入り口より立派に仕上げる。

この建物の建築様式は、基礎部の形状に合わせて、上部の木造の建物もコの字型につくられている。建物は重層で、入母屋づくりの中央主役の両端部より、両翼に楼が突出する。日本人の私たちにとっては、京都、宇治にある平等院鳳凰堂の平面プランを想像すると理解しやすいかもしれない。ちょうど鳳凰堂の本堂、翼楼、尾楼で構成された平面プランから、背面の尾楼を取り除いた平面プランと近似する。この翼楼の突出部の建物も、棟の方向を生殺と同じ方向にとり、その間を別屋根で接続した形式を取るの、屋根の造りはかなり複雑である。しかしそれが却ってこの建物の建築美を創出しているともいえる。

主殿は梁行き五間とし、その他の箇所では梁行き三間とし、側、入り側通りに柱が建ちならぶ。また、入り側柱の2本の柱間（身舎）を、高さ 1 m 程の基段を積み、床を高める。身舎は、上部を幅 10cm 程の板を張った鏡天井とする一方、側、入り側通りの柱間（庇）は、化粧垂木をみせた化粧屋根裏とする。側、入り側柱は、頭貫位置にて虹梁でつながり、この虹梁は、屋根勾配とほぼ同じ勾配で、桁の直下に火入れで挿入される。この虹梁尻の彫刻木鼻をいわば持ち送りとして、側通りよりさらに外側に、出桁を設け、垂木を支承する。この収まりは、垂木を平に使い、垂木の上に直接、瓦を敷き、瓦の加重を支えるという構造的な要因によるものと思われる。この垂木の先には簡単な彫刻の施された鼻隠板をはりつける。瓦は丸瓦と平瓦で構成される他、平瓦の下に、さらに平らな瓦を敷き詰め、

軒下よりみた場合の化粧材としている。

この午門の木造建築は構造的には壁面が殆ど無く、見た目に不安定である。いかにして構造的安定を保っているか興味深い点でもある。また、屋根の上部に施された多くの焼き物の破片で象られた漆喰彫刻は、この時代の建築美術を代表する作品であるといえる。私自身は、多少、バロック的な廃類さが漂う点が目に付く。

### 太和殿 (Noi Dien)

午門を抜けると、王宮中心部へと入る。両脇に設けられた方形の2つの池を立ち割る形で橋が架かる。この手法は、午門より太和殿 (Noi Dien) への短いアプローチをより一層、深く見せる技法で、アンコール・ワットなど、クメール建築にも用いられる視覚的技法であるといえる。

参道の前後には、青銅製の柱が3本立ち、それを横架材でつないだ、いわば鳥居状の門をくぐる。この門も中国の宮廷建築に倣い、何がしか象徴的意味の下に建立されたのであろう。Hueの王宮は、北京の紫禁城を構したとされ、その建築コンセプトには、各所に相似がみられる。その後、後段かの階段をのぼり、宮殿前の広場へといたる。この広場の両脇には、従九位より、正一位までの18にも及ぶ官位が示された板碑が整然と並んでいる。その当時、皇帝への拜謁行為の際、官位・身分的順位に官吏が整然とそこに整列した風景が思い起こされる。

さて、いよいよ、正殿である「大和殿」であるが、桁行き九間、梁行き七間の堂々とした重層瓦葺の建築である。建物の正面には、石柱で支えられた孫庇がさらにつき、建物にアクセントを与える。この孫庇の持ち送りも特徴的で興味深い。この庇は、石柱の上に挿し肘木で上下、2段に持ち送りを出す。さらにこの持ち送りは、庇の垂木を支える丸桁を支える。次の桁行きである庇部分は、登りに虹梁を挿入し化粧屋根裏とする。その次の桁行きは、火虹梁を柱間にかけて上に、Uの字型をした束型の構造材でもあり、装飾材でもある部材が上下2段に挿入され、上部の桁をささえる。この桁行き空間が天井高も大きく、最も荘厳につくられており、何がしか、重要な空間として捉えられていたに違いなかろう。その次の桁行きでは、蛇腹天井とし、急激に天井高を下げる。さらにその次の桁行き二間は、鏡天井とするが、天井高も低い。また、建物中心部の奥には、金箔の施された二重の天蓋で荘厳された玉座が配される。即位など重要な政務・儀式の際に皇帝が臨席した姿が浮かぶ。柱、虹梁、羽目板、化粧垂木などは、朱色に彩られ、その上に金色の彩色が施される。また柱には昇竜が施される。

### Hung TO Mieu Temple (興祖廟)

チャンドック門を抜け、Hung TO Mieu Temple (興祖廟) へ向かう。同寺院は1804年に創建されたが、1947年の戦禍により焼失し、1951年再建。1995～1997年にかけて修復された。この建物の特徴は、双堂建築で、前面部の礼堂は梁間三間、中央間には立派な彫刻の施された三重の虹梁と束で構成される。その反面、金堂の方は鏡天井とし、簡素である。この両方の建物の間には、大樋が渡され、両者の雨水を側面へ排水する。この排水口には、立派な怪物の顔が用いられる。

### 世廟

興祖廟を後にし、その南に位置する世廟へ向かう。同寺は阮朝の菩提寺とされ、本堂内部には、歴代の皇帝の位牌壇が整然と並べられている。この建物も双堂建築で、かなり規

模の大きな建物である。同建物は 1990 年代後半、ポーランド政府との協力の下、修復がなされた。概観する限り、解体修理は必要なところのみの部分解体であったようである。

## 2-2.ティエンムー（Chua Thien Mu、天姥）寺

阮朝王宮を後にして、香河（ソンフォン）の川縁を南に進み、ティエンムー（Chua Thien Mu）寺へ向かう。20～30分、自転車で走ったであろうか。地図では目と鼻の先の様に記されているが、自転車でむかうには、王宮からかなりの距離であった。名所である高さ21mの八角形の中国式の塔は、川縁にあり、実見すると規模はさほど大したものではない。やはり、中国、西安にある大塔と見比べると、少々、見劣りがする。1601年に創建されたこの寺院は、この塔の背地に、仏教寺院が存在し、寺観も整備され、境内も清掃が行き届き、寺院として、厳然と息づいている事を窺わせる。

「観光地」というと、とかく観光名所がスポットとして浮かび上がるが、観光地が観光地である為には、やはり周辺環境がしっかりと整備されている必要がある。近年の観光地は、どうも、20年ほど前に建てられた建物と、現在に建てられた建物の「不整合性」が目立つ。それは、周辺環境が時代と共に「活性化」されてゆく証でもあるのかもしれない。しかしながら、あまりにも混沌とした整備状況を見るに限り、日本の行政能力の限界を感じるし、また、その一方で法整備の不備を感じる。厳然、整然とした街並みに、まったく異質の建物を建立することには、誰しも違和感を覚える事であろう。しかし、日本の街並みの場合、まったくバラバラに建てられた建造群の中に、強調性、調和性を見出すほうが、難しいのかもしれない。

遺跡保存技法の強調性、調和性、そしてその反対の動き。この相反する問題をどのように善処してゆくかは、今後の日本の街づくりに求められる問題であろう。

## 2-3.ティエウティ（Thieu Tri、紹治）帝廟

Hueの街から南西へ7kmのところにあるティエウティ（Thieu Tri、紹治）帝廟は、第三代ティエウティ帝（1841～1847）の息子トゥドック帝（Tu Duc、嗣徳）により、1848年に建立された。廟に到着すると、ゆるやかな登り勾配の敷地を利用して、テラスが四段にわたり設置され、その中心部と両脇に階段が設けられている。そのテラスの前面には、周壁に囲まれた廟と、内部へのアクセスである門が目線を遮る。この門は、三間三戸の門で、梁行きも三間あり、中心部の方一間を楼閣とした重層門である。この身舎部には虹梁が三重に架り、庇は彫刻の登り虹梁が側、入り側柱を繋ぐ、随所に彫刻木鼻、彫刻持ち送りが施された美しい造りが目を引く。

この門をくぐると、正面に正殿を配し、その両脇に2棟の付属建物が配された伽藍が目に入る。この両脇の付属建物は梁行き三間、桁行き五間の寄棟造りの建物で、両脇間を大壁とする。内部は、登り虹梁が入り、身舎には虹梁が掛かる。中心の建物は額に「表徳殿」とある。桁行き七間、梁行き七間、寄せ棟造り、瓦葺。四周に化粧屋根裏の庇を廻し、正面二間目の桁行きは、虹梁で内部空間を高め、次の桁行きでは、蛇腹天井とする。また、それより奥は鎖天井とする。この鎖天井の部分は床高さを30cm程高めた板張りで、正面側のセン敷きの上間とは趣を異にする。残念ながら、王宮内の建物の多くは、床を現代風のタイルとしていたが、当初はここでみられる様に、表面に釉を施したセン敷きであったと思われる。このセンは、緑と黄色のセンを市松模様に敷き詰めてはいるか、四半敷きとはなっていない。内部の極彩色、彫刻といい、残存状況も良く、ヴェトナムの伝統木造建築を知る上で非常に貴重な遺産であるといえる。

建物の平面構成は、日本の中世仏堂の「外陣」と「内陣」、そして、内陣の側背面三方を囲むように「脇陣」、「後陣」が取りつく平面構成を想起させる。ただ、空間的な相似はそこまでで、内外陣境を分ける様な虹梁、間仕切りなど、両者を空間分節するような柱同装置は無く、僅かに両者の床高さと、天井の造り、高さを変える事によって変化をつけている。いずれにせよ、正面より桁行き二間目の虹梁が架った化粧屋根裏天井の空間が、同霊廟を参拝した人々に供された空間なのであろう。また、この様に、前後に重要な2つの空間を持つ形式は、双堂建築の系統を伝えるものであろう。

#### 2-4.ミンマン (Minh Man、明命) 帝廟

次の目的地であるミンマン (Minh Man、明命) 帝廟へ向かう。同廟へ行くためには、こちらから、一旦、フォン川を渡らなければならない。渡し船に乗り、対岸へ渡る (1人20000ドン、1.3ドル)。対岸に到着し、川岸より数百メートル歩むと同廟の人目が見える。正面の本来の門は現在、閉鎖されており、その横に設けられた人口より中に入る。人目で入場料50000ドン (約3.3ドル) を支払い、中に入り、歩みを進めると、最初に、ミンマン帝の功績をたたえた碑文が奉納されている建物へと至る。この建物も相当、痛みが激しい様で、建物全体をトタンの覆屋が覆う。この建物を奥へさらに進むと、正面に段状のテラスが広がり、その正面に三間三戸の正門へと向かう。この門をくぐり抜けると、正面に主殿、両脇に側殿を配した伽藍へと至る。この建築平面構成は、先般のティエウティ帝廟と同配置を取る。

また、正面向かって左側の建物 (右従寺) は、1997年にトヨタ財団の基金を用いて修理された建物で、内部には、その当時の解体された部材や、試験的に造られた屋根詳細の1分の1模型、基貴部の模型等が展示されている。ここで興味深い点は、日本の木造建築の修復技法が随所に用いられている点である。この建物自体は、桁行き五間、梁行き三間の小規模な建物で、その上、彫刻は木鼻尻等、極限られたところにしかなく、彩色も施されていない。概観する限り、この規模や、殆ど壁が無い上、簡素な構造を見る限り、恐らく、工事は建物を全解体して行われたのであろう。この点は王宮内にあったポーランド政府の支援の下に行われた世廟の修復作業とは、多少、趣を異にするようである。また、腐朽部分を継ぐ事により、当初材を出来るだけ再利用している。また、どうしても再利用が不可能な場合は、新材を入れるが、その材には、焼印で「年号 (1997)」を入れる。屋根、基礎など、収まりの難しいところは、1分の1の大きさの模型を追って検証したようである。この建物に対峙する位置には、同規模の建物があるが、その建物の場合、背面ならびに西側側面に、大壁が付くが、この建物では、中心部の一部と西側の壁面を残すのみである。恐らくは解体修理の過程で、同壁面が当初のもので無い事が判明したため、取り除いたのであろうか。

向かって右側の建物 (左従寺) の傷みは相当にひどく、緊急の修復を要する事は明白である。日本語が書かれた表示などが見られるが、右従寺を修復の際に、同建物の修復も検討されたのであろうか。現状を見る限り、解体修理に向けての作業は何も行われていないようである。いずれにせよ、早急な修復が求められる。中心部の主殿 (崇恩殿) は、綺麗に修復が行われている。ちょっと、見た目には、新築の様に見える。いや、ひょっとすると新築かもしれない、と思わせる。

この建物群を抜け、さらに奥へ進む。各建物の配置は、中心軸を中心として左右対称に建物が配されている。また、その上、中心の主要な建物が建つ地盤面は、周囲に擁壁を設け、丘状に高められている。そのため、次の明楼殿へは、高まりより一旦、階段を下るよ

うに導線が道られており、主要な建物の背面門を出た位置よりは、裏の建物（明楼）の全景が見渡せる。中心伽藍と明楼を結ぶ線上にも建築的な工夫が盛り込まれている。まず、階段を降り、次に明楼の前に設けられた2つの他の間の参道を通りぬけ、さらに新たに高まりを設けて、その上に明楼が建つ。

この明楼は方五間堂で、四方三間に棧唐戸を配した扉とし、隅部をレンガ積みの大壁とする。重層のつくりは美しい。内部は、四周を化粧屋根裏として、身舎の方三間の部分を鏡天井とする。この建物も修復、もしくは、新築、されているようである。もし、この建物も修復されていたとするならば、トヨタ財団の支援によって行われた修復技法とは、まったく違った修復技法でなされた事が理解出来る。もし、それはヴェトナム式であるならば、ヴェトナムの文化財修復技法が、かなり新築に近い状態にまで修復する事を要求する事を多少なりとも理解出来、興味深い。それにしても、現地ヴェトナム人観光客の多さには驚かされる。

## 2-5. ザーロン (Gia Lon9、嘉隆) 帝廟

その後、初代皇帝であるザーロン (Gia Long、嘉隆) 帝廟へ向かう。ミンマン帝廟より先にあるこの廟へは、道路もかなりの悪路で、地道を通らねばならない。さらに川を渡る必要がある。これらの条件を何とかクリアーして、川を渡りきったのはいいが、その後、1 km 近くを歩かねばならず、かなり、アクセスは悪い。結局、川岸に止まっていたバイクを借り (25000 ドン)、1 km 先のザーロン帝廟を目指す。

同廟は 1814~1820 年にかけて建立されたとされるが、内部には、主殿 (明成殿) が残されるのみである。この建物も、一瞥する限り再建された建物の様で、どうも古めかしさが見られない。建物の配置は他の霊廟に見られるものと同形式であろうか。ガイドブックに書かれている様に、同廟は、もっとも離れた廟であり、アクセスも悪く、訪れる人影もほとんど無く、廃墟の中に、鳥のさえずる声のみが響き渡る。

## 2-6. カイディン (Khai Dinh、啓定) 帝廟

もと来た道に戻って、次の訪問先であるカイディン (Khai Dinh、啓定) 帝廟へと向かう。同廟は、第 12 代 (1916~1925) 皇帝カイディンが 1920 年より建設を開始し、同皇帝が 1925 年に没した後、1932 年まで通算 12 年間にわたり建設が進められた霊廟である。正面入り目より入ると、ひときわ目を引くのが、旧来の中国的建築群の建物構成を廃し、ヨーロッパ的な建築エレメントをふんだんに採用している点である。平面的には、諸門、諸建造物が中心軸を中心として左右対称に建造され、それら諸建物の機能も、旧来の霊廟建築の建物配置とさほど変化無いようにとれる。しかしながら、その建築エレメントはまさしく Occidental (西洋的) である。フランスの植民地下に建立されたとはいえ、ヴェトナム文化を代表する霊廟建築にこれほどまでに西洋趣味が挿入されると、多少どころか、かなり違和感を覚える。また、基本的には漆喰彫刻が基本となっており、それが現在、長年の風雨により表面を黒い雨だれが覆い、外観上も決して美しいとはいえない。どうも、日本の 90 年代のバブル期に建造された「キッチュな建築」を想起させる。伽藍の中心のある主殿 (啓成殿) は、その創建当時、彫刻装飾の飾られた白亜の豪勢な建物であったと思われるが、今は、汚く黒い雨だれが建物外観を覆う。その姿は、現代建築の末路であるかのようにも思われる。

創建当時の豪華さは、人間の 1 人のライフスパンである数十年という単位でさえ、持ちこたえる事が出来ないのであろうか。幸いにも内部は、雨漏り、腐朽等、建物をいためる

ような事もなく、当時の陶器片のモザイクで釣られた装飾が残る。しかし、壁面全体を埋め尽くすかのようになされたその漆喰、陶器片装飾に、私個人の感想としては、「美しさ」を見出す事は難しい。確かに美しいのであろうが、あまりにも装飾過多である。「美」の基準は、時代によって変化するものである。しかしながら、モダニズム建築が世界中を席卷していた、1920～1930年代に、これほどまでに脆い、持続性の無い、その上、明らかに装飾過多な建築物をつくりだそうとしたヴェトナム王朝の末期にみえる、一種の廃頽、デカダンスを感じる。

## 2-7. トウドウック (Tu Duc、嗣徳) 帝廟

カイディン帝廟を後にして、次の訪問地で、1864～1867年にかけて建立されたトウドウック (Tu Duc、嗣徳) 帝廟へ向かう。入り口の門をくぐると、内部への進路は池にそってゆっくりと右へ曲りながらすすむ。この池の奥には、他の中に柱を建てて懸造りとした華奢な建物 (xung Khiem Pavillon) が建つ。この様に、水面近くに建物を建てて、正面の庇部分を他の中へ張り出し、懸造りとした建物は他所ではあまり見かけない。見た目にもいかにも涼しげな建物である。さて、進路を左にとると、そこには霊廟中心部への入り目である謙宮門が建つ。この門の形式は他の霊廟の正門に見られるように、三間三戸の門で、中心部の方一間のみを重層とする。門をくぐると、両脇には方三間堂の右従寺、左従寺が配される。右従寺の方は、正面に棧唐戸をつけ、内部を囲む。恐らくは、左従寺の建物も柱表面に残された痕跡より、同じく棧唐戸で閉じられていたものと思われる。その他の三方の壁は大壁とする。屋根は珍しく切り妻造りで、この屋根の形状は同建物の規模が、他の同じ建物より一回り小さいことに起因するのであろうか。内部の構造は、ティエウティ帝廟の建築に近似し、側、入り側通りを一材の化粧虹梁でつなぐ。

「和謙殺」と額に書かれた桁行き九間、梁行き七間の主殿は、きれいに修復がなされている。内部に入ると、他所で見られた朱色と金色で彩られた堂内とは趣を異にし、黒に近い黒褐色で仕上げられた、落ち着いた雰囲気のある堂内である。内部の空間構成は他の霊廟建築と変わらず、四周に化粧屋根裏の庇を配した上、外陣空間と内陣空間に分割された中心部と、内陣の側背面に板壁を張る。また、外陣の中心部は、虹梁を挿入し、天井高さを高め、その次の桁行きに蛇腹天井を入れる建築スタイルには変わらない。内陣部の床を一段高める事は他の正殿と同じであるが、床は、板敷きでなく、タイルを貼った土間である。この廟の周囲には、その他に、皇后廟など他の施設もみられる。

## 2-8. ドンカイン (Dong Khanh、同慶) 帝廟

引き続き、トウドウック帝廟の500m程離れた位置にあるドンカイン (Dong Khanh、同慶) 帝廟を訪れる。1889年創建。Hueの霊廟のなかでは小規模な部類に属すが、門、主殿等の建物が現存する。基本的な建物配置の形態は他所の霊廟と同じである。門はかなり傷みが激しく、多くの鉄製足場、支柱などで補強されている。また、右従寺も内部に多くの木造の支柱がなされている。近年、これらの支柱がなされ、屋根の瓦が降ろされたと思われるが、この破損状況では、出来るだけ早い時期に解体修理をしなければ、建物自体が崩壊の危機に瀕している事は明らかである。また、左従寺は周囲のレンガ造の壁面を残すのみで、矩体は残されていない。

## 3) フェという歴史都市の今後

今回の Hue の滞在中、王宮ならびに6ヵ所の霊廟を見学出来たが、各霊廟は阮朝という

ヴェトナム統一を成し遂げた王朝の栄華を反映する反面、その後のフランスによる保護領、第二次大戦、ヴェトナム戦争と、ヴェトナムが辿ってきた従属的な歴史、戦争の惨劇をも反映しているようでもあった。また、現存する遺構も、木造で建立されているがゆえに、維持管理の滞った建物は、上からの雨漏り、下から白蟻により崩壊の危機に瀕している建物も多い。今回の Hue 滞在は、ヴェトナムの木造建築技術水準の高さを教えると共に、現況の維持管理の貧相さを痛切に感じるものであった。

ホイアンとは違い、中心部の町並みには、殆どといって良いほど、歴史的な建物は無く、歴史的建造物は、王宮、霊廟といった特殊な建物に限定される。フエ、ホイアンともに、近世に入ってよりの木造の歴史的建造物という共通項はあるにせよ、都市開発の側面より考慮すると、発展する都市部より孤立した場所に位置するフエの王宮、霊廟などの歴史的建造物は、保存という観念よりは、都市開発、都市機能の発展といった様々な現代事情より隔絶した保存活動が展開し易いようにも思われた。

しかし、その一方で、旧王朝に属す遺産という側面が、現政権にとっては、ただ単に国民全ての文化遺産とは見出し難い側面もあってか、政府による保存対策は、それ程、大規模には行われていない様子であった。1993年に世界遺産に登録されて以降、国際的な協力のもとでの援助も加速した事かとは思われるが、今後、10年以内に、崩壊の激しい建造物の緊急解体修理が行われなければ、多くの貴重な木造建築が失われる事は間違いない。

### 3. 伝統的町並みのホイアン (Hoi An)

#### 1) ホイアンの歴史的・地理的背景

上述した Hue と同じく、ヴェトナム中部に位置する。出土遺物などより、古来より、中国、東南アジア諸国をつなぐ港町として栄える。ホイアンという地名が生まれたのは 16 世紀末と考えられるが、その歴史は紀元前にまで遡るとされる。ホイアンの建立以前の文化、いわゆる「前ホイアン時代」には、大きく分けて、紀元前数世紀から紀元後 2 世紀、中部ヴェトナムを中心に繁栄したサーフィン (Sa Huynh) 文化と、その後、2 世紀より 15 世紀に繁栄したチャンパ (Champa) 文化に分けられるとされる。16~7 世紀を頂点として、ホイアンは阮朝の交易の中心地として繁栄する。しかし、その繁栄は 18 世紀までで、トゥーラン (現ダナン) の街が建設されると、その経済基盤が移行、ホイアンは交易地としての役割を終える。しかし、逆にそれが幸いし、伝統的な町並みが現在まで残される結果となる。

ホイアンの街中にあるサーフィン博物館の入り口を入ったすぐには、Bai Ong (1000~1500AC)、An Bang (2300 前)、Hau xa (サーフィン後期)、xuan Lam、Trang Soi (8~14 世紀)、Lang Ba (16~18 世紀) など、各考古発掘地より出土した遺物が展示されている。また、これらの出土物には、火葬をした人骨を埋葬した骨壺や、装身具に用いられたと考えられるガラス、メノウ、貴石などで出来た装身具がみられる。それらのガラス、貴石の色は青もしくは赤である。器は土器で、表面に縄文様が施されたものもみられる。その他、鉄器も散点、釣られていた。ホイアンが発展を遂げた 16~18 世紀の遺構を残す Lang Ba 遺跡よりは、中国陶磁の白磁の合子が発見されたようであり、その形状は、クメールでもしばし見られるタイプに近似する。

HoiAn の街は、1999 年、世界遺産にも指定され、近年、ここを訪れる人の数も急速に増加する。ここでは、観光客に解放されている伝統家屋 (フーンフンの家、タンキーの家など)、華人会館、寺院、ならびに昭和女子大の援助、監督の下、解体修理の行われた家屋 (グエンチミンカイ 6 番、グエンミンカイ 7 番、チャンフー 121 番、チャンフー 142 番

など)を中心に調査を行った。

## 2) ホイアンの歴史的建造物

### 2-1.日本橋 (来遠橋)

同橋の建築年代は、16世紀末期の1594年とされているが、墨書、文書等、明確な根拠は発見されていない。しかしながら、この橋は、当時、HoiAnに滞在した日本人によって建立されたとされる。この橋の特徴として、橋の導線が中央と両脇間の三方に分かれる事である。また、中央の間には、二重虹梁がかかり、虹梁上には、斗供が乗る。確かに、屋根架構(とりわけ斗の形)には、他の中国寺院建築にはみられない日本寺院建築的な要素がみられる。

### 2-2. フーン・フンの家 (Nha CO Phung Hun9)

日本橋を渡ったところに位置するフーン・フンの家 (Nha CO Phung Hung) へと向かう。1700年代後半に商家として建造されたこの建物は、洪水の際に1Fの品物を2Fへ運び込むための方形の取りだし口が2Fの床に設けられている。建物の架構は、方三間の建物の中心部、方一間の4本の柱を通し柱(ホイアン一柱式)としその上に登り梁をかけて処理をする。またこの柱を繋ぐ様に貫を通す。梁行きにも貫を入れ、その中心に束を建て棟木を受ける。構造的には、かなり簡素な構造といえよう。また、建物の中心には祭壇が天井より吊り下げられている。コの字型に造られた中心に中庭を設けるが、その中庭の上にも瓦屋根をかけて覆う。また、この中庭の周囲には小さなテラスを2F部分に設ける。

### 2-3.タンキーの家 (Nha Tan Ky)

同建物もコの字型の建物で、内部に中庭を持つ。母屋には、三重の虹梁がかかり、化粧屋根裏とした豪勢な作りが目を引く。内部には、位牌壇が2カ所にわたり設けられている。

### 2-4.グエンチミンカイ6番

現在は、本屋さんになっている。コの字型の平面に中庭がつく。隣のフーン・フン(Phung Hung)の家と同じ平面、構造形式をとる。

### 2-5.グエンミンカイ7番

1泊20ドルで、ゲストハウスを経営。部屋はかなり小さい。内部は、綺麗に修復され、伝統的なたたずまいを残す。1泊ぐらい、当時の雰囲気味わうのであれば、良いかもしれないが、部屋はかなり小さい。

### 2-6.カムフォンのディン (Dinh Cam Pho)

グエンチミンカイ通りにある廟で、本堂の両脇に付属建物が接続し、コの字型の平面をつくる。また、本堂の前には方形の東屋が建つ。内側に対して非常に開放的で、建具、壁面は無い。本堂の中心部はレンガ造であると考えられるが、側面の栓は直径50cm近くある木造の元栓である。側面の付属建物は梁間三間で、身舎は虹梁がかかり、登り梁とし、底部は、二重に虹梁をかける。同じ方三間堂でも、Hueの霊廟でみられた、梁間の架構とはかなり趣を異にする。

## 2-7.廣肇会館 (Cantonaise Assembly Hall)

広東よりの人々の集会所。中国風の派手な建物。本堂の梁行きにかかった四重の虹梁が目目を引く。また、この本堂の正面側通りには、20 cm 角程の石柱が建つ他、その石柱の両脇間には、石材で出来た虹梁が架かる。石の使い方としてはナンセンスともいえるこの虹梁の挿入手法を可能としているのは、用いている石材が、硬質の花崗岩であるからであろうか。しかし、ここまで木造の構造を石造で表現した石造架橋は珍しい。

## 2-8.チャンフー142番

現在、木彫品のみやげ物屋となっており、正面で実演も行っている。道路に面する主屋は、平入りで、桁行き、梁行き共に三間である。内部架構は、身舎に虹梁がかかり、中心部方一間の柱が通し柱で、天井まで延びるホイアン一柱式と呼ばれる架橋である。また、身舎、庇共に、登りに虹梁が入る。この土屋の後一間は三重虹梁大瓶束と、この建物の中で、最も飾られた空間である。この2つの建物には間仕切りが無く、空間をおおきく使う。また、この空間の一番奥には、位牌壇が設けられている。正面ファサードには、小さな庇が設けられ、正面よりの外観を飾る。この小さな庇は上の屋根と殆ど軒の出、高さもあまり変わり無く、建物を保護するというよりも、むしろ意匠的な意味合いが強い様に思われる。

## 2-9.チャンフー121番

チャンフー142番の建物の前にある建物で、現在、洋服店として用いられている。規模は小さく、屋根の架構は、ここでもホイアン一柱式と呼ばれる架構であろうか。ただ、桁行き通りにも柱とほぼ同じぐらいの径の貫が入り、建物を固めるのが特徴的である。この建物は、主屋の前に、一間の吹き放ちの庇を設け、戸締りは、入り側通りで行うように取められている。

## 2-10.貿易陶磁博物館

チャンフー通り沿いにある2F建ての伝統的な建物を、貿易陶磁を展示するための博物館としている。ヴェトナム陶磁が展示されている他、中国磁器、日本の肥前焼きも展示されている。ヴェトナム陶磁器の窯には次の様な産地がある。Gom Sanh（北ヴェトナム；縦長の壺で、胎上は褐色である）。Hai Hung または Hop Le（北ヴェトナム）。Bat Trang（南ヴェトナム）。Binh Dinh。My xuyen（中央ヴェトナム）。Phuoc Tich（中央ヴェトナム）など。

## 2-11.福建会館 (Chua Phuckien)

同じくチャンフー通りにある建物で、多彩な彫刻に朱色、金色の彩色が施された、いかにも中国的（ヴェトナム的）で、現世利益を求める為に奉られている様な建物である。建物も新しく、現代も同地区の華僑の信仰を集めているのであろう。

## 2-12.陳祠堂

双堂形式の建物で礼堂内は三重虹梁がかかる。この建物の中では中国、ヴェトナムの古銭が売られていた。初代ザーロン（嘉隆、Gia Long；1802～1820）、2代ミンマン（明命、Minh Mang；1820～1840）、4代トゥドゥック（嗣徳、Tuong Due；1848～1883）など、これら Hue で訪問してきた霊廟に見出した名前を古銭の中に見出し、何がしか共感

を覚える。これらの文字は漢字で書かれており、それが読めるという事に、親近感を感じる。きっと、カンボジアを訪問するインド人は、王名やヒンドゥーの神々等、インド的なものを見出し、何処と無く親近感を感じるのであろう。

## 2-13.日本人の貿易商人、谷弥次郎兵衛の墓地

Hoi An の街の近郊にある、朱印船貿易時代の日本人の墓地。同墓地は、1647年に没した日本人の貿易商人谷弥次郎兵衛の墓地とされる。言い伝えによると、谷弥次郎兵衛は江戸幕府の外国貿易禁止令に従って日本に帰国する手はずとなっていたが、ホイアンの恋人に会いたい一心で、Hoi An へと戻る事を決意し、その帰路、没したとされる。また、この墓地は日本の方向である北東 10 度を向いている。墓の背面には、「昭和三年西暦一九二八年文学博士黒板勝美教授ノ提唱ニ基キ印度支那駐留日本人一同工事監督又順化府在住中中山氏ニ委託シ此墓所又修築ス」と刻まれた墓碑があり、第二次大戦以前に、現地在住の日本人篤志家により整備が行われた事が分かる。

辺り一面、田んぼで、全く何も無いところに、ポツツリとこのお墓が建つ。何も無い、人里はなれた田んぼの中に墓地を造成という点にいったい、どういう墓相学的根拠が見出せるのであろうか。無論、17 世紀の 350 年前とは、かなり周囲の景観も変わっているのかもしれない。夕日が沈む穏やかな情景の中、この谷弥次郎兵衛という人物が、350 年も前に、この地でどんな思いで没していったか、とその当時を思い偲ぶ。朱印船時代、その当時の日本人の行動範囲は広範囲に及んでいた事が想像出来る。その当時、海外へ行く、という事は、現代では月へ行くという事にも匹敵するような、突出した命がけの行為であった事が想像出来る。

夕日が沈みゆく。その光景を田んぼのど真ん中で、日本から数千キロはなれた、ここ Hoi An の 350 年前の同朋の方の眠る地で見るとこの光景に、なんとも言葉では言い表し難い不思議な情念がこみあげてくる。その当時における「異郷における望郷の念」というのは、現在の様に飛行機で数時間飛ばせば帰郷出来る世の中とは違い、並大抵のものではないのではなかったであろう。中国的な様式のお墓に、墓石に見える「日本」という文字が、ようやく、この墓地に日本人が眠る事を示唆する。それ以外、この墓地が日本人墓地である事を示すものは無い。「同化」「帰化」「順化」……。その文化へ解け込むこと、そして反目し、自分の培ってきた土壌を堅持する事の並大抵でない努力を感じる。

## 3) ホイアンの街が与える印象

道路側に対して入り口を設けた平入りの建物の並ぶ街並みは、確かに日本のどこかの宿場街を十分想起させる。その他、間口三間程のこれらの建物は、その三間の間口を、道路側に開け、三間共、壁を設けず、吹き放ちとするあたりは、道路を通る人々を対象として、商いを行うには格好の間取りであるといえる。

通り沿いの各家は、観光客相手のレストラン、みやげ物店、ホテルなど、観光施設へと急激な転換を遂げ、街が観光都市へと急速に模様替えしている様が窺える。また、ヨーロッパ人観光客を惹きつける為には、ただ、単に伝統的な街並み、施設をディスプレイするのではなく、ヨーロッパ人の好む、バー、ビリヤード台を設置したカフェ等、ヨーロッパ的（それともアメリカ的？）な憩いの場も必要不可欠な施設なのかもしれない。

夜になると、みやげ物の赤・青・緑と、色とりどりのヴェトナム提灯の並ぶ店先が暗闇に映える他、所々に吊られた赤い提灯が街の情緒を醸し出す。それら街を構成する要素は、「観光開発による発展」、というこの街の現代の宿性を顕しているのかもしれない。しか

しながら、16世紀より商都として形成、発展を遂げてきたこの街の辿った歴史的背景を考えると、現代の観光ビジネスは、商都としてのこの街の歴史的な位置付けからは、決して離れるもので無いのかもしれない。

おそらく、観光化され、世界遺産に指定される以前の Hoi An を知る人々にとっては、現在みられるみやげ物、観光客相手のレストランが幅をきかすこの町の現状には納得出来ないかもしれない。しかし、はじめてこの地を訪れた私にとっては、何がしか、何処となくノスタルジイに駆られる景観が存在する街である。

世界の各地、人の営み、活気であふれる街は、絶えずその装いを変化させる。それはそれで、街が活性化している証でもあり、自然の成り行きかもしれない。この街も決して、厳然と景観が整っている訳ではないし、様々な時代の建物、建築材料、景観の混沌がみられる。しかし、この混沌とした Hoi An の街並みは、日本的、近・現代工業生泉村で建設された街並みの景観が醸し出す雰囲気とは、明らかに趣を異にする。この「混沌さ」の違いは、いったい、何処に起因するのであろうか。ここに、各民族、文明と結びついた「人の営みの、時系列的な息づき」があるように思う。

「営み」「息づき」「反復」「混沌」……。都市スケールとまでいかなくとも、街を、街区を彩る要素は多分にある。それらの各要素が、その街々の装いを醸し出す。現代の活性化という名の都市開発行為は、各街の持つ独自の要素を踏みにじるかの様に行われた無秩序な開発で、まるで、過去の息づき、人の営みを消しゴムで消し去るかの様な抹殺的な開発としか思えない。

そんな街並み論を考えつつ、ふと、我に帰ると、このヴェトナムの歴史的な街の中にいる自分が、違和感無く溶け込んでいる事、紛れ込んでいる事に気づく。少なくとも、ヨーロッパにいた時の様な、マグレブにいた時の様な、無意識のうちの緊張感は無事に気づく。アジアに、とりわけ東南アジアにいることは現地社会へ「紛れ込む」事が、他の社会より日本人にとっては容易である事かもしれない。日本が、いわば大航海時代を迎えた 15～16 世紀、多くの日本人同朋がこの地へ進出出来たのも、いわば、「正統」でない中華文化にある、日本とヴェトナムという大中華文明の辺境の地にある両文化の中に、お互いの近似性を見出し、住み心地のよさを感じたからではないだろうか。

## 4. ミー・ソン (Mi Son) からニャ・チャン (Nha Trang) までの間に所在するチャンパ遺跡

### 1) チャンパの歴史的・地理的背景

チャンパは、インドシナ半島に建立されたチャム族による王朝で、紀元 2 世紀、中国人による統治に反抗して建国されたとされる。しかし、10 世紀以降、中国から独立し、勢力を伸長してきたヴェトナム（金族）より南侵を受け、次第にその領土を失い、漸次、南へと拠点を移転、ついに 17 世紀には王国自体が消滅する。

拠点を移動した結果、チャンパ遺跡の分布範囲は、南シナ海の海岸線沿いに南北に広く分布し、建築年代も 8 世紀より 17 世紀の広範囲にわたる。また遺跡は、その分布により、「ミー・ソン遺跡群」、ホイアン南部の「クアンナム遺跡群」、クイニョン近辺の「ビンディン遺跡群」、ニャ・チャン近郊の「ボー・ナガー遺跡群」、ファン・ラン、ファンティエット近郊の「ホー・ハイ遺跡群」そしてさらに南部の「衰亡期の遺跡群」の 6 群に分ける事が出来る（重枝）。

今回の調査では、その内、「ミー・ソン遺跡群」、「クアンナム遺跡群」、「ビンディン遺跡群」、「ボー・ナガー遺跡群」の 4 群の遺跡群 15 ヲ所を調査した。

## 2) チャンパの歴史的建造物

### 2-1.ミー・ソン (Mi Son) 遺跡【ミー・ソン遺跡群】

チャンパ王国は中国史料では「林邑国」とよばれ、その王都は、ホイアンの西に位置するチャ・キュウとされている。ミー・ソンは、ホイアンより南西 45km に位置し、チャ・キュウ (Cha Kieu) に栄えたチャンパ王国の聖地として位置づけられる。四方を山に囲まれ、北には聖山マハーパルヴァタが聳え、現在でも、鬱蒼とした森に囲まれ、聖地としての雰囲気を残す。碑文によると、古くは 4 世紀末、バードラヴァルマン 1 世 (Bhadravarman I) が、シヴァ神をまつる神殿を建立したとされるが、その時期の遺構は検出されていない。現在の遺構は、8 世紀から 13 世紀までに建立された大小 70 棟を超えるレンガ造祠堂が集積し、チャンパ建築最大の遺跡群として名高い。

#### Hグループ

料金所より、アメリカ製のジープに乗って数分ほど奥へと進み、ジープを降りて、林の中の小道を進む。車を降りて少し進んだところの右に小道があり、その道をあがると、Hグループ (11 世紀初頭～12 世紀後半、ビンディン様式、重枝) に到達する。小道を見つけ、ふと目を丘の上に転ずると、レンガ造の建造物の断片が聳えたち、遺跡の存在を示す。それを目印に、引き寄せられるように、近くまで辿りついたが、現状のあまりの惨状に仰天した。そこには、最初に見えた建物の断片以外は、レンガの残骸の山と、その上に生い茂る草しか見出す事が出来なかった。私の持つ図面を手がかりに建物を探すが、この瓦礫の上に立って見渡す限り、各建物はわずかにその存在を確認出来るのみで、建築的調査などは、とても不可能であるかの様に思えた。将来、発掘調査でも行い、この瓦礫の山を取り除かない限り、建物の位置でさえ、まともを知ることは不可能に近い状況である。最初に目に入った建物の断片は、図面と照らし合わせる限り、中央塔の北西隅である事が分かる。率直に言って、現況で建造物として理解出来るのは、Hグループでは、この中央塔の北西隅の一部しか残されていない。ヴェトナムに来て、最初に見たチャンパの遺跡がこの様な痛ましい保存状況である事に、多少、衝撃を受ける。

気を取りなおして、このわずかに残された部分を観察すると、それでも、いくつかの興味深い点がみられた。例えば、基段と身舎の間に幅 20 cm 程の石材を挿入する他、塔部の隅にも縦に板状の砂岩を縦に挿入する。これらの砂岩材は、一部材のモジュールが小村であるレンガを構造的に安定させる為、レンガの数倍の規模がある砂岩を挿入する事により、安定を図ったと考えられる他、そこに彫刻を施す事により、惰性的に繰返されがちな装飾パターンにワンポイントを加える事を意図したものであろう。また、隅部の付柱や、中心部と隅部の間の縦のラインで構成された装飾などは、クメールにおいては 9 世紀以前のブノン・クレン様式の建造物に見られる意匠で、古式であるといえる。

#### B、C、Dグループ

Hグループの見学を終え、次にチャンパ遺跡の中心伽藍ともいえる B、Cグループへと向かう。まず、Bグループであるが、当初は 24m あったとされる中央塔 B1 (12 世紀中葉、ビンディン様式：重枝、p.112) は、ヴェトナム戦争の際のアメリカ軍の空爆により、悉く破壊され、現在は砂岩の基段を残すのみである。他者のガイドの説明を斜めに聞きながら、目を転ずると、確かに中央塔の西側にポツカリと大きな穴が開いている。この砂岩の基段はかなりの規模であり、当初は 24m の高さがあったという事がうなずける。

また外側にはミニチュアの建物で飾られた屋形龕がつく他、内部には、リングが現存し

ている。カンボジアのコー・ケー遺跡におけるリングを内包する祠堂と、この B1 建物の規模は、同じぐらい、もしくは、この B1 建物方が巨大かもしれない。しかしながら、内部のリングの大きさは、明らかにコー・ケーの方が大きい。この点はコー・ケー遺跡のリングがいかにか大きいかを物語る。また、基段の石材を見ると、各所に T 型の鋸を止めた跡を残すのが目に付く。石材の刷り合わせ具合はあまり良くない様で、石材表面には鑿跡が残る。この点を見る限り、専らレンガで構築されたチャンパ建築においては、石材を積み上げる技術は、この時期、さほど発展していなかったようにも感じられる。また、その一方、この Mi Son のレンガ造建築は、7 世紀初頭のシャンプーヴァルマン (Sambhuvarman) が、カンボジア王、マヘンドラヴァルマン (Mahendravarman) 王と親交があり、耐久性の高いレンガ造建築技術がカンボジアよりもたらされた可能性が指摘されている (重技、p105)。しかし、カンボジアから、技術を移転するのであれば、ただ単に、レンガ造積み上げ技術のみならず、建物の形態にまでその影響がみられるはずであるが、ここでは、クメール建築の影響は、見られない。

次に、伽藍南西に位置する B3 建物 (10 世紀中葉、ミソン A1 様式：重技、p.114) に目を転ずる。東側を正面としたこの祠堂は、残存状況も良く、チャンパ建築特有の中心部を凸型に突出させ、そこに妻飾り、付け柱等で飾るスタイルを取る。また、塔部も同じく、中心部を凸型に突出させ、柱型の間に仏龕を挿入する点が特徴的であるといえる。その上、身舎の両脇間には、妻飾りと付け柱で枠づけられた屋形龕の中に女神像がモチーフとしてあしらわれているのも特徴的な点であるといえよう。この縦と横のラインを基調とし、平面的に凹凸をつけ、装飾に屋形龕の装飾を配す一連のパターンがチャンパ建築の初期の段階にみられる特徴であろうか。インドにおける、カーンチ・プラムのカイラーサナータ寺院 (8 世紀初頭) や、パッタカルの寺院 (8～9 世紀) の中に、付け柱の間に、同種パターンのモチーフを見出す事が出来るかもしれないが、インドの場合は、彫刻がより立体的である。また、それを可能にしているのは、建築材料が石材であるという事に起因するかもしれない。両者のモチーフ分類を、もう少し、詳細に比較、検討する必要がある。

同じく B グループの南東にある宝庫と呼ばれる B5 建物 (10 世紀中葉、ミソン A1 様式：重技、p.116) は、長方形の重層の建物で、上部を船型屋根とする。クメール建築でも、プラサット・プム・プラサット等、8 世紀頃の比較的古い建築にみられるこの屋根の形は、それ以降の時代では消失する、いわば古式な屋根の形であるといえる。

この建物は、入り口を北側面、それも中心でなく西寄りに取る点が特徴的であるといえよう。また、重層部には、スリット型の小窓を南北に 3 ヲ所、東西に各 1 ヲ所の合計 8 ヲ所持つ。また、身舎邦にも、東西に 3 本の連子格子の入った子窓を持つ。この様に多くの窓、つまりは換気の為の開口部を持つ点は、非常に興味深い。床西等に、台座等を設置したような目立った痕跡は見られないが、東側壁面に細長い彫りこみがみられる。ここに、もし、九曜石 (Neuf Devinite) が挿入されていたとするならば、中央塔の南東に位置するという伽藍位置の近似性も含め、クメール建築における「経蔵」と同種の機能を持った建物である点が推察される。

その他、興味深い点として、開口部の上村を突き付けとしており、9 世紀よりクメールで見られる留め切りの手法とは違い、どちらかといえば、サンボール・プレイ・クックの建造物の開口部枠の突き付けと同じ建築技法を採る。外部は B3 建物で概説した様な、縦型の柱型のモチーフの間に、屋形龕を配し、その中に女神像が彫り込まれる。しかし、この仏龕と女神像は、南側壁面では省略されている。その理由として、単純に考えられる点

は、外側を廻る周壁が近くを廻るため、殆ど参拝者が見える位置ではなかった為に省略されたのかもしれない。

この B5 建物に対峙する位置にある B6 建物（10 世紀末、重枝、p.117）は、聖水庫と呼ばれる建物で、内部に扁平の水瓶が残されている事に起因する名称であると思われる。この様に、内部に水瓶を残すような建造物はクメールでは管見する限り、存在しない。また、クメール建築では、この位置には、「南経蔵」とシンメトリーで建つ「北経蔵」が通常、配される。同建物は、上部矩差部を逸している。平面プランが矩形である事より、恐らくは B5 建物のような船型屋根で覆われていたのであろう。

B1 建物の前には、連弁装飾の彫りこまれた石製の柱脚が据えられている。回廊中では、前後に 2 列、計 8 ヶ所の礎石が据えられているが、現況ではそのいくつかを欠損している様にもみえる。残念ながらその構築物がどのような立面をしていたのか示す資料は無い。しかしながら、B1 建物の横には、六角形をし、表面にギリシャ神殿の柱にみられる様なフルーティング（溝彫り）が表面に彫られた柱が並べられている。これらの柱が祠堂の前面部に建っていた可能性が高く、もし、そうだとすると、レンガ造の主堂の正面に、六角形の石柱で構築された間口三間の列柱殿が建つ。その容姿は、あたかもギリシャのパルテノン神殿にみられる様な、柱と梁で構築された石造軸組の建造物が聳える事となる。そうすると、当時の寺観がかなり興味深いものとなる上、東南アジア建築においても、例外的な建築と看做す事が出来る。レンガ造の様な組積造建築の前面部に、木造で軸組構造物を建てたことは想定出来るが、ここで見られる様に、石造の軸組構造物は他に例をみない。この石柱で構成される建造物に関しては、チャンパ建築における位置付けを、もう少し、深く掘下げて、考慮すべきであろう。

B グループの東側正面には、矩形の建物の D1 が建つ（矩形房、10 世紀中葉～後半、ミソン A1 様式：重枝）。この建物の内部は現代に改修され、内部に同遺跡より出土した彫刻類が展示出来るよう、上部にコンクリートの屋根が架けられている。この建物の内部は、巨大な柱型が 2 ヶ所に設けられ、壁面を三分割する。6 m 近くある桁行き空間に、レンガ造や石造の屋根がかかっていたとは考えにくく、当時はそこに木造の屋根がかけられていた可能性が高い。残念ながら、木造梁のかかっていた事を示す痕跡は見出せない。内部に展示されている展示物のうち、入口のすぐに表示されている半円形の妻飾りは、聖牛ナンディンに乗る多臂のシヴァ神が表面に彫られている（同種のシヴァ神の妻飾りは、雁塔、ポー・ナガルなどにも見られる）。この部材はレンガ造の建物の妻飾りであると考えられるが、上部が円形であり、どのように挿入されていたか興味深い（ポー・ナガルでは、中央祠堂の前面部にこの妻飾りが入る）。通常、クメール建築におけるレンガ造建築では、妻面もレンガを積み上げて構築されている他、その形状は三角形が基本的な形状である。

B グループの北側に建つ C グループの中央祠堂 C1（10 世紀後半、ミソン A 1：重枝、pj17）は、長方形平面で東側に前室を持ち、東を入り口とする。中央塔は、その平面形状よりも、屋根は船型であったと思われる。堂内中心には一辺 1 m 強のヨニが座る。聖水を外へ流すための溝、ソーマストラはみあたらない。どのようにしてリングに注がれた聖水を排水していたのか、興味深い。また、この中心のヨニも基本的に角張った水平のラインで構成されており、その時代の様式を知る上で興味深い。その他、この堂内の隅に置かれている 50 cm 程の小さな台座は、縦横のラインで構成された古めかしいタイプの台座で、カンボジアのプレ・アンコール様式に類似した装飾パターンを持つ。

現場にての目視では分かりにくいですが、この C1 建物の軸線は、周辺建物、周壁の軸線とは異なり、南へかなりの角度でふれている。この軸線とほぼ、対応する位置に楼門である

C2 建物と、その先に矩形房の D2 建物（10 世紀、ミソン A1 様式：垂枝、p.120）が建つ。

この各建物の軸線の不一致は、9 世紀前半に建立された C1 祠堂の構造体を残したまま、10 世紀後半に新たにレンガを積み、前室を付け、規模の拡大を図った為、旧祠堂の軸線がそのまま踏襲されたとされる（重枝、p118）。

C2 建物は C1 建物の門として建てられた事は明らかである。通常、中央塔の内部にシヅァ神の象徴であるリングが奉られる場合は、その対に位置する建物に聖牛ナンディンを奉るケースが多分にみられる。この C グループの場合、この C2 建物がその建物に比定出来る建物といえよう。また、興味深い点は、その内部の四隅を円形柱の付け柱状に造り出す事により、四方の天蓋柱を想起させる装飾を持つ事である。この丸い付け柱は、直径 40 cm 近くあり、建物の規模に比してかなり大きい。ちなみに、B1 建物の対にある楼門 B2 には、このような付け柱装飾は内部に見られない。

次に、宝物庫 C3（10 世紀末：重枝、p.1T9）であるが、同建物は、興味深いことに、内部を 2 分割する様に仕切が内部に設けられている。一般的には、「主室」と「前室」という形での大小、大きさの違った空間の接合により堂内を 2 分割する平面形態は見られるが、このように、ほぼ同質の空間を 2 分割する例は、クメール建築では管見する限り、例をみない。レンガの積み上げ方、せり出し屋根の積み上げなどをみても、外壁と同じ時期に、この間仕切り壁が積み上げられている事は明らかである。また、この入り口の位置が、偏重しており、興味深い例であるといえよう。この様に内部を二分する間仕切りを持つ建物は、Mi Son 遺跡においては、しばしみられる。この C3 建物のも B5 建物（B5 建物では、内部を二分する様な間仕切りは無い）と同じような、東側壁面に、細長い凹みをもつ。ただしここでは、中心軸を中心として左右対称でないし、かなり修復の際に、新しいレンガが挿入されており、その痕跡は明確でない。B5 建物の様に九曜石が挿入されていたかどうかを知る手がかりは皆無である。宝庫とされるこの建物が、いったい、どの様な用途に用いられていたのかについては、興味深い点である一方、クメール建築における「経蔵」と呼ばれる建物の位置付けを考える上においても興味深い示唆を示す。

## A グループ

さて B、C グループの見学を終え、次に A グループへと向かう。B、C グループの東側を進み、さらに川を渡った、対岸の A グループは位置する。第一印象として、この A グループも、一般の訪問客には、何を見て良いのか分からないほど崩壊している。現状では、わずかに各建物の基段のみが、そこに建物が残されていたことを示す程度である。中央塔である A1 建物（10 世紀、ミソン A1 様式：重柱、p.110）内には、それでも石材を組み合わせさせた巨大なヨニが堂内中央に残されており、この建物の在りし日の姿を物語る。この台座も縦横の角張ったラインで構成された台座で、一番下の段には、E1 祠堂の台座（ダナンの彫刻博物館展示）に代表されるチャンパ建築初期の装飾である唐破風型の妻飾りをした仏龕と、そこに挿入された人物立像のモチーフが見られる。この A グループは、正面を西としており、B、C グループとは反対の方角を取るのも特徴として挙げられる。A1 中央塔は、] .969 年 8 月、アメリカ軍の爆撃により殆ど完全に破壊されており、それ以前に撮影された古い写真より、往事の姿が理解出来るのみである。空爆により破壊される以前は、高さ 28m の塔が聳えていたとされる。

## G グループ

さらに、藪を抜け、G グループへと向かう。直射日光の厳しさも、木陰に入ると何処よ

りともなく吹く涼風が通りぬける。このGグループ（1157年）も鬱蒼と草に覆われて、中央祠堂のみが残される。これだけ周辺の整備事業が進捗しているにもかかわらず、遺跡は瓦礫の山で殆ど当初の形状を留めない程、草に覆われている状況を目のあたりにすると、草を放置する事によって、遺跡を逆に保護する意図でも込められているのかと、多少、勘ぐりも入る。このGグループも殆ど、当初の形状を留めない。しかし、中央祠堂の基段にはめ込まれたカーラのテラコッタが、この建物の建築的特徴を表しており、Mi Son においてもここにしか見られない特徴であるといえよう。中央祠堂の周囲には有刺鉄線がはりめぐらされており、内部には立ち入る事は出来ない。その他、祠堂の北西には、立派な碑文が、その当時の栄華を象徴しているように聳え立つ。Mi Son はアンコールとは違い、未だ碑文を収蔵庫に収納するなどの処置はなされていないようである。

### Eグループ

次に向かったEグループも、殆ど壊滅しているといってよく、かろうじて、宝庫 E7 と副祠堂 E6（10世紀末：垂枝、p.125）が、その当時の面影を留める。E7もCグループの宝庫 C3 で見られた様に、建物の内部を2分する様に間仕切りが建物内部に設けられている。このEグループは、Mi Son 最古の建造物とされる E1 祠堂が伽藍の中心に位置する。今回の Mi Son 見学において、最も期待していた建物の1つではあったが、現況は、その期待を裏切るかの様に全くといって良いほど瓦礫の山と化している。中央塔の基段の上に残された、懸綱の施された丸柱が、わずかにこの建物の古めかしさを表す。E1 と E4 との間には、大きな穴がポツカリと開くが、これもやはり米軍による爆撃であろうか。Eグループに隣接して建つFグループも瓦解したレンガの山といっても過言でないほど崩壊している。

垂枝は、ミー・ソン最古の建造物である E1 祠堂を検討した結果、建物内法が 6.9mx6.3m と大規模であるにもかかわらず、壁厚が薄い。また、内部に四本の柱を支える為の礎石がある、等の点より、上部の架構は木造であった可能性が高い事を指摘している（重枝、pp.122-123）。

## 2-2.トラ・キュウ (Tra Kieu) 遺跡【クアンナム遺跡群】

Mi Son を引き上げ、HoiAn への帰路に付く。その途中、Tra Kieu 遺跡のある Cha Kieu に立ち寄る。しかし、遺跡は全くといって良いほど存在せず、小高い丘の上には、キリスト教の現代建築の教会が建つのみである。丘の麓の写真屋の主人によると、同遺跡はアメリカ軍の爆撃を受け、ことごとく破壊されたとの事であった。真偽の程はさておき、確かに、その写真屋のショーケースの下には、チャンパ遺跡の彫刻部材が無造作に転がっていた。少なくともここにチャンパ遺跡があったのは確かなようである。

## 2-3. ドン・ジュオン (Dong Duon) 遺跡【クアンナム遺跡群】

Dong Duong (ドン・ジュオン) は、875年の年号の記された碑文が残され、インドラバルマン2世が、ラクシュミンドラロケーシュヴァラを献じた大乘仏教寺院であったとされる（千原、p.210）。ドン・ジュオンという言葉は、「ジャー（ヤーン）のドン」（神の野という意味）が転注したと考えられ、中国人は「東陽」と読んだ（チャンパの遺産と文化、p.103）。ステルンは、同建築を9世紀後半から10世紀初頭に位置付けている。平面図を見る限り、相当、大規模な寺院であった事が窺え、伽藍は、3つの寺苑より構成されていることが分かる。しかし、現状では、第一寺苑に残された碑文庫と呼ばれる建物の

西壁西のみしか残されていない。非常に残念なことに抗仏戦争ならびにヴェトナム戦争の争乱により伽藍は悉く破壊されてしまったとの事である。図面上で残された伽藍が当初よりの建造であるならば、当時の東南アジア仏教建築を知る上で、非常に貴重な寺院であることは言うまでもなく、残念としかいいようがない。図面中でのみ確認可能な第三寺苑にある多柱殿は、その後の東南アジアの仏教建築で発展してゆくヅィハーラ建築と関連が指摘出来る建造物で、パイヨン様式における前柱殿、ポスト・アンコール期の小乗仏教系テラスを考慮する際に、貴重な資料として実見するのを楽しみにしていただけに非常に残念である。惜しいことに、現況では、多柱殿の位置さえも全く分からないほど、レンガの残骸と草が地表面を覆い尽くす。

さて、唯一残された碑文庫の外壁にみられる装飾パターンは、縦のラインを基調としてはいるものの、Mi Son の B グループに見られたような、屋形龕に入る女神像のモチーフは無い。また、建物の南西隅の柱型にわずかに彫りこまれた連続花葉文様も、かなり崩れた感じがぬぐえない。このレンガ表面に施された文様は、この 1 ヶ所にしか見られない。レンガの積み上げられた他所に彫刻が見られないという事は、レンガも石造と同じく、積み上げた後、彫刻を施した事が分かる。この彫刻の足元には、ミニチュアの建物装飾が見られるが、これも Mi Son にみられるものよりも立ち上がりが高く、簡素で、全体的に縦長な印象を与える。西側壁面の開口部の北側には、八角形の付け柱がつく。節状に繰り型があるが、最終的な仕上げはなされなかったのであろうか。クメール建築では、通常、付け柱は、開口部枠材のすぐ脇に挿入される。しかしここでは、突出した控柱の前に収められている。またここでも、開口部枠の上材は突き付けである。

#### 2-4. チン・ダン (Chien Dan) 遺跡【クアンナム遺跡群】

Dong Duong を出発、次に Chien Dan (チン・ダン、11 世紀初頭～12 世紀後半、ビンディ様式：重枝) へと向かう。同遺跡は、国道沿いに位置し、初めての訪問者には分かりやすい。この遺跡の名称であるチンダンは、日本語の梅檀(せんだん)の本の名前である。11～12 世紀に建てられたこの建物は、現在、中心部の 3 基の塔を残すのみである。しかし 1996 年に行われた修復作業にともなう発掘調査で、前面部にマンダパの遺構が確認された説明書きにはある。遺跡の北側には、その時に出土した遺物等がコンクリート製の倉庫に展示されている。説明書きによると、年代的には南側、中央、そして北側の順で古いとされる。

レンガで出来た建物の基段周りには、砂岩が積み上げられ、そこには、戦いを演じる人物、踊り子などが彫刻されている。かなり傷みが激しいせいもあるが、ダナンのチャム彫刻博物館で見た、Mi Son、Tra Chieu 出土の人物像と比べて、その動きにどうも硬さを感じられるのは、Chien Dan 遺跡がそれらの遺跡よりも後世の作であるからであろうか。まず、最初の印象として、その建物の規模の大きさに圧倒される。アンコール周辺にあるレンガで出来た建物に比べると、かなり規模が大きい。この時代になると、建物の高さが高くなる分、周囲の装飾が少なく、簡素である。

3 基ある塔の内、まず南塔の内部に入る。建物内部は、周囲より寄せ集められた砂岩の彫刻石材置き場として用いられている。ふと、上部に目を転ざると、堂内の高さ 4 m 程のところに、砂岩に穴のあいた突起物が見られる。カンボジアのサンボール・プレイ・クックの諸遺跡では、同位置に、L 字型の砂岩で出来た突起がつくが、両者は同じ目的で挿入された建築部材であると考えられる。サンボール・プレイ・クックの L 字型の突起を最初に見た際には、同突起を用いて、木製の天井を掛ける為の木材を受けた事も否定出来な

かったが、ここの突起には穴しかみられなのを発見し、これらの突起が布裂の天蓋を吊る下げる為に用いられた建築部材であるという推測を強くする。管見する限り、クメール建築では、確か次の様式であるプレイ・クメイン様式にまでは、このL字型の装飾がみられるが、以後のレンガ造建築では、同突起は無い。そのような点を考慮すると、同建築部材が見られる遺跡は、クメール建築においては、古式な建築であった。しかし、チャンパ建築においては、今回の調査中、同遺跡にしかこの様な突起を見出せなかった。

壁面三方には小さな壁龕が彫りこまれている。その他、壁面の隅には石材が挿入されている。レンガ造の建物では外側へ開こうとする負荷重に耐えかねて、建物の隅部に亀裂が入っているレンガ造建築をみかける。この石材の挿入意図は明確でないが、もしかすると、この塔が建立された当時、その様な構造的問題点をすでに当時の人々は知っており、それを克服し、壁面隅の亀裂を防ぐために、同石材が挿入されたものかもしれない。

さて中央塔の内部にも、北塔と同じく、高さ4m程のところ穴の開いた突起がある、また、この中央塔の内部は、レンガが多く掻き落とされている。自然に落ちたというよりも、人為的に削られたようである。今回の調査中、塔内部のレンガを人為的に掻き取ったような痕跡をしばし見つけた。チャンパ遺跡における盗掘は、塔中心部の床を掘り返すだけでなく、壁面に何がしかの埋蔵物を見出し、それを抜き取る事を目的としたのであろうか。それとも、削り取り、粉碎したレンガを他の目的（例えば何か建築材料として用いるなど）等、別な意味があるのであろうか。

正面入り口の上部には厚さ50cm、幅70cmと90cmの垂厚な石材が楣として挿入されている。また、残念ながら、前面部の突出部の傷みが激しく、扉の位置が不明である。この前面部の上部は、レンガをせり出しとした上、線やかな尖塔アーチ形としている点は興味深い。（北側の塔の内部は鍵がかかっており、内部に立ち入れず。）

3基の塔の立つ、さらに北側には、鉄筋コンクリートの展示室が近年、建設されている。その内部には、多くの遺物が収蔵されており、Chein Dan 遺跡の彫刻を知る上で興味深い資料を与えてくれる。

## 2-5.クオン・ミー（Ounag Mi）遺跡【クアンナム遺跡群】

Qunag Mi（クオン・ミー）遺跡（10世紀初頭～10世紀中葉、ミソン A1 様式、重枝）は、Tam Ky（タム・キイ）の街よりさほど離れていない位置にあるが、国道1号線からちょっと西へ入ったさらに南に位置し、現地人の案内無しにたどり着くのは困難である。建物は南の塔より順に大きく建造された3基の塔が並列して建つ。南塔が10世紀前期、中央塔が10世紀中期とされ、北塔はその中間の時代に建造されたとされる。宿場、中央塔共に前室がつくが、北塔に前室は無い。また、この前室の側面には、かなりの大きさの上下二段に火炎の波型の妻飾り装飾をもつ建物装飾が付くのが特徴的である。とりわけ中央塔南側の建物装飾は残存状況も良く、破風の火炎文様も美しい。（残念ながら現在、足場が紀まれている上に、昼過ぎに訪問した為、逆光で、その美しい壁面を堪能出来なかった）。

南塔の前室北壁面にも同じように建物装飾が綺麗に残っており、同遺跡を価値づける。開場の身舎部は、中心部を建物彫刻で凸形に突出させる Mi Son で見られたいわば古式なスタイルとし、屋蓋部にも建物装飾で突出させる。また、彫刻に見られる九拜等、古式な要素を多分に残す。あまり、10世紀の建造物に「古式」という言葉を用いると語弊を生ずるが、クメール建築では、同様式は、プノン・クレン様式の9世紀前期～中期に位置付けられるスタイルで、ちょっと、そういう意味でも、「古式」かもしれない。また、この南

塔の興味深い点は、その平面にあるといえる。通常、チャンパ建築における主室の平面は矩形であるが、ここでは、後ろ側を広く取った凸型をしている。その上、前室が、主室の平面規模に近いほど、大きな空間が割かれている。この大きな前室空間する解釈として、重枝は、主室の空間の拡大に限界があるため、前室の空間拡大により、祠堂内の空間性の充実が試行された（重枝、p.139）、とする。しかし、そうであるならば、他のチャンパ建築、ましては、隣接する2つの祠堂に拡大された前室が見られないのか、という疑問点が浮び上がる。また、通常、主室と前室では、その機能的な役割に歴然とした違いがある。

北塔内にみられる特徴としては、火焰文様をあしらった壁龕を施す。堂内に壁龕が彫り込まれる例は、チン・ダン遺跡等で見られたが、壁龕の周囲に火炎文様をあしらう例は、今回の調査では、このみである（ただし、多くの遺跡において、基段を含む、身舎の下部は、レンガが侵食、もしくは人為的に扶られており、当初、同位置に、壁龕があったかどうかを確認する術を失っている遺構も多い）。

3基の塔とも、かなり傷みが激しい。現在、周囲に足場がかけられ、修復作業を継続的に行っている。しかし、この足場も設置されてから、かなりの年月が経過しているようで、足場の所々に「傷み」が見られる。ちょっと、現在の修復作業の進捗状況に一末の不安がある。遺跡の全体を概観すれば、基段が殆ど崩壊したレンガ等で埋没している状況で、周辺の整備事業に伴う、発掘作業が順調に進めば、かなりの遺物が発見されることが期待される。建物基段は殆どのか所で埋まっているが、南塔の南側のみは、レンガで埋まった基礎部を明らかにするための土砂の除去作業が始まっており、砂岩の上の彫刻された基段がそのみ表出している。

## 2-6.バン・アン (Bang An) 遺跡【クアンナム遺跡群】

遺跡見学を終え、Tam Ky (ダム・キイ) の街へ戻って、遅い昼食を軽く取る。その後、2時間余り、国道1号線をもと来た方向へひたすら北上し、Hoi An の近くにある Bang An (バン・アン) 遺跡へ向かう。同遺跡は、主室部が10世紀から11世紀に造営され、前室部は12世紀中葉から末期に付加された（重枝、pp.132-133）とされる。高さ21.5m、幅4mで、主室が八角形をしているのが特徴的である。八角形平面といえば、カンボジアのサンボール・プレイ・クック遺跡群に数多くみられるが、同遺跡と Bang An 遺跡とは、年代的にも、地理的距離もかなりの開きがある。その上、外観上の特徴に、両者の間の共通点を殆ど見出せない。

建物正面の前室は、アンコールに見られる様に、その前後に開口部枠が無く、空間のいわば膨らみが無く、通路の様に一直線である。（通常、アンコールにおける「前室」は、その前後に開口部枠を設ける事により、前室としての空間をつくる。ところが、チャンパ建築では、開口部枠は1ヵ所しかなく、その収め方の違いが、前室という、1つの空間の位置付けを全く違ったものとしているようである）。この前室の中心部には、砂岩で出来た開口部下枠が残されており、ここに入り口枠材が組まれていた事が分かるが、横材、上材とも消失しており、当初、どの様な形状の部材が組まれていたかは詳らかではない。また、この前室の側面には、縦長の窓が付くのも特徴的である。いずれにしてもここにおける「前室」は、クメール建築の「前室」の様に、小さいながらも1つの空間をつくる、といったものではなさそうである。

建物の立面は、高さが高い分、急峻である。また、主室は西洋のドーム（ミラノのドゥオーモのクーポラを想起してもらえばいい）に見られる様に、そそり上がった簡素なデザインで、通常、チャンパ建築にみられる様な、縦と横の繰り型を複合させ、凹凸した形状

をつくりだす装飾とは全く趣を異にする。その上、主室の屋蓋とは独立した屋蓋をつくる点も特徴的な点であるといえよう。この前室の屋根は四方より勾配を付けたいわば「宝形屋根」で、この屋根も非常にシンプルにまとめあげられている。壁面も殆ど、無装飾といってよく、身舎と屋蓋の間にモチーフと繰り型が入る以外は、非常に簡素である。基段は崩壊しているとはいえ、ここでもかなり簡素に収められていたのではなかろうか。平面が八角形である上、屋根の形状もかなり、他者のチャンパの建築とは、異なるが、共通点として、建物が「平面に比して建物が縦長」であるという点であろうか。

## 2-7.フンタン (Tap Doi ともいう) 遺跡【ビンディン遺跡群】

6時に宿を離れ、バス乗り場へと向かう。6時20分、Quy Nhon (クイ・ニョン) へ向かう。バスは外国人観光客向けのバスで、ローカルのバスとは違い、そんなに満員でないのが助かる。2時間毎に休憩を取るが、8時間の行程をバスに揺られるのはかなり疲れる。また、道路は Hoi An 近郊とは違い、かなりガタがきており、現在、多くのカ所で修理を行っている。2時過ぎに Quy Nhon へ到着。ガイドブックにも記述無く、適当にバイクタクシーを捕まえて、ホテルを探す。海沿いにホテルを見つけて、いざ、遺跡見学を開始する。

最初に向かったのは、街中にあるフンタン (Tap Doi ともいう) 遺跡 (12世紀末、ビンディン様式：重枝) である。近年、修復作業が行われ、周辺も綺麗に整備されている。東を正面とした2棟の塔が立ち並ぶ。2棟とも様式的に同じである。特徴的な点は、上部の屋蓋部の形状で、明らかにインドのバダミやパッタダカルにある水平の層により砲弾状に構成された屋蓋に近似する。(北側塔では、殆ど屋蓋部の表面を消失)。インドの場合は、水平に何段かに区切られ、次第に低減する屋蓋部の普段に、馬蹄形アーチを挿入するが、ここでは、そこに、ミニチュアの建物装飾が挿入されている。身舎の立ち上がりが高く、急峻であるのはチャンパ建築の特長であろうか。また、屋蓋部と身舎部の間には、水平に砂岩を挿入し、レリーフを彫りこむ。また、その隅部には石材を挿入しガルダを彫りこむ。屋蓋部の隅には石製の建築飾 (Antifix) で飾られるが、それは、クメール建築の様に、独立して建つのではなく、塔の矩体のレンガのなかにいわば「挿入」されるように収められている。この建築飾には彫刻の無いものも多いが、近年の修復の際に挿入されたもののようなものである。

身舎部は、5列の柱形で四分割され、その上、側、背面では、中心部を四重に前へ向かって階段状にせり出す。この階段状に低減しながら前へせり出す事により、上部の破風も大きさの違った四段の破風で構成された特徴的な立面をつくりだす。正面中央にも同種の妻飾りが用いられていたと思われるが、崩壊し確認不可能。

基段は、石材で構築されており、(南塔もおそらく、石材であった可能性が高いが、修復の際には、レンガを垂直に立ち上げたのみで収められている) 曲面がついた繰り型である。今までの同遺跡以北で見た建造物では見られない、簡素で、かつ曲面を用いたスタイルに特徴を見出す。石材は花崗岩が用いられているが、これは修復の際に挿入されたものであろうか。南東隅の一部に当初の彫刻の残された石製基段がのこる。この材は、どうも砂岩のようである。そこには、四半円形の繰り型部分に波紋の火炎文様、その間の平坦な部分に獣神がわずかに残されている。

当初材である中央塔の開口部廻りには、花崗岩が用いられている。塔の大きさに比して、開口部枠材の幅が40cm程と小さめである。しかし、その上部、前後に挿入されている平板の楣石は大きい。開口部は突き付けで収められている。この開口部枠の内側には、扉を

吊りこむための幣軸穴が穿たれているが、この大きさが 20 cm 近くもあり、この穴がかなり大きめである事は否めない。開口部幅は 1 m 15 cm。内部は方形で、壁龕は無い。また天井高さ辺りにも Qunag Mi でみられた様な、石製の突起は見当たらない。内部はおかしな事に、上部へいってもレンガが殆どせり出さず、寸胴である。現在、塔の頂部には大きな穴があくが、修復の際に、せり出し屋根が修復されなかったであろうか。北塔も開口部廻りを花岡岩とする他、仕様は中央塔とほぼ同じ仕様である点が目を引く。

## 2-8. 銀塔 (Banh It、バン・イット) 【ビンディン遺跡群】

引き続き、銀塔 (Banh It、バン・イット、11 世紀初頭：重枝) へと向かう。11 世紀前期に建てられたとされる同遺跡は、中央塔の他、宝庫、碑文庫、楼門等、諸建物が伽藍を構成して残されている。寺院の南に位置する碑文庫は、四方に開口部を開く。また、四方共に扉を設けなかった様で、石材で出来た開口部は四方共にみられない。高さ的にはそれほど高くは無く、石材の仕様は、屋蓋部隅に細長い石材が入る以外は、見当たらない。また、屋蓋部は、2 層目のみ柱形で飾り、その上に、簡素な形状の建物装飾を飾り、Mi Son で見られる様な中心部を凸型に突出させる事はなく、平坦かつ簡素である。身舎は、柱形を七本配して六分割とし、中心に凸部を設け、入り口とする。入り口上部に破風は設けられているが、内部のせり出しアーチが剥き出しとなっており、妻面は装飾石材等では塞がれなかったようである。基段は、建物装飾を用いるが、ここでも、かなり大雑把な感がぬぐえない。

次に楼門とされるこの建物は山の中腹のかなり険しい位置に建つ。当初、これだけ急な傾斜に階段が設けられていたとも考え難いが、いかに中心伽藍への導線が設けられたのか、今後の発掘調査などによる解明が待たれる。この建物は東西に入口を持つ。この建物にも殆ど砂岩の仕様はみられない。また、身舎部の立面構成は、5 本の柱形による四分割で、碑文庫と類似した様式であるといえる。ただ、腰元に練り型を付け、左右両脇に建物装飾が用いられている。基段も縦の柱形を基調としたモチーフである。現在、レンガを刷り合わせて、修復作業が行われている。

中央塔の装飾パターンは、屋蓋部の各層の隅に建物装飾を飾る他、各層の中心部を凸型として、建物装飾をつける。身舎部は柱形 5 本で四分割し、中心部を凸型として上下 2 段の破風で飾る。また前面部には前室がつく。身舎の腰元には楼門と同じく建物装飾でかざる。基段にはいくつか石材が残されており、当初は、建物周囲を囲む形で石材の基段が構築されていたのであろうか。屋蓋部、身舎部共に、凸型に突出させ、建物装飾を用いる辺りは、チャンパ建築のオーソドックスなスタイルであるといえる。

中央祠堂の南に建つ宝庫は、東西に細長く、内部に間仕切りがあり、堂内を二分する。また、現況では、北、南、そして東の三方に外部への入り口を設ける。Mi Son にみられる宝庫では、通常、入り口は北側のみである。この宝庫では、南側に石材の楣石が残されている事より、南の入り口は当初よりのものであった事が分かるが、東の入り口は、崩壊が激しい上、楣石など、明らかに開口部であった痕跡は残さず定かではない。ファサードは、重層とした上で、屋蓋を船型屋根として、妻面に装飾破風で飾る。この装飾破風は円形をしており、中心部にガルダ？ とおぼしきモチーフを配し、火炎文様で構成されている。ちなみにここには一枚岩の鏡板の彫刻の施された妻飾りが無く、レンガで構成されている。身舎部は付け柱で分割され、その間に、渦巻き唐草の連続文様が入る。一般的に同種の文様は S 字型に連続した花葉文様が彫り込まれるが、ここでは螺旋状に文様が連続して描かれる。基段は、ガルダとおぼしき神歌が、建物を支えるかの様に手を上に挙げ

た容姿で彫り込まれている。仮に同神獣がガルダであるならば、アンコール地域にしばし見出すことが出来る構図と共通点を持つものかもしれない。頂上からは、周辺の景色が全貌出来、美しい周辺環境を一望出来る。

## 2-9.金塔 (Thap Pou Loc) 【ビンディン遺跡群】

金塔 (Thap Pou Loc、13世紀初頭、重枝) は国道1号線を北より向かうと、最初に見える塔で、このビンディン遺跡群の北の玄関口の遺跡という事がいえるかもしれない。1号線よりは簡単に見つける事が出来るのであるが、そこへ向かう為には曲りくねった地道を幾度か曲らねばならず、辿りつくのは簡単でない。また、この丘の麓に辿りついた後、丘を駆けあがるのであるが、頂上までが思ったより距離がある。

さて、頂上には、レンガ造の塔が1基建つのみである。その他の付属施設があったのかもしれないが、見渡す限り、その他の建物はみられない。立面構成に関して、屋蓋部は、2層目が残るのみで、中心部は突出し、建物装飾をつける。身舎部は5つの柱形にて四分割されている。側背面三方には、凸型の突出が付き、建物装飾を飾る。この妻面は、他所(飯場、フンタン)で見られた様な火炎文様で縁取られた様な華やかな装飾破風は無い。正面入り口の周囲ならびに、妻飾りは完全に崩壊している。この妻飾りの高さを見る限り、側背面よりも高さは低かったようである。基段は、殆ど完全に表面を欠損し、現在、そこに新しいレンガにて補強されている。内部は、特徴的な痕跡を残さない。建物は近年、応急的かもしれないが、目地にモルタルをいれたレンガで補修がなされている。

塔の上にはサボテンが繁茂し、この丘の樹木も乾燥に強そうな低木が生い茂る。この地域の気候が乾燥気候である事を示す。その他、緩やかな台地を削って平坦としているところが2ヵ所ほどあり、そのような場所に付属の建物を建てていたのかもしれない。周囲の山々には、岩石の露出がみられる。アンコールの様にはるばる石材を遠方のプノン・クレン丘陵より運搬してまで、石造建造物に拘っているのに対し、ここの建造物は、近傍の山に優良な石材があるにも係わらず、レンガで建物を建設する事に拘っているようにもみえる。チャンパ王国の衰亡期の建築で、17世紀に建立されたとされるボー・ロメ遺跡に至るまで、チャンパ建築では、主たる建築材料に終始レンガを用いる。

## 2-10.銅寺 (Thap Canh Tien) 【ビンディン遺跡群】

次に銅寺 (Thap Canh Tien、13世紀初頭、重枝) へ向かう。13世紀(現地ガイドブックには16世紀とある)の建立とされる同寺院は、1基の塔が建つ。同寺院は、チャンパ王国が1067年、北の大越国により攻撃され、王都ビンディン(中国語で「平定」)を放棄し、この地に新たに都を築いた際の中心寺院とされる。チャパンと呼ばれる同都は1471年後期黎朝によって滅ぼされるまでチャンパ王国の中心として存続したとされる。

塔の屋蓋部は、中心を凸状にして、突出させる他、塔の隅部にもかなり規模の大きな建物装飾を配置する。同形式は、さらに南部にてみられる隅部の建物装飾を異常なまでに、肥大化させたボー・ロメやボー・クロン・ガイなどの建築へのある一種、過渡期的様相と捉えるべきなのであろうか。それとも、チャンパの南方系の特長であらうか。この隅の建物装飾には、さらに各隅に砂岩で出来たヒレ状の突起物(何と呼ぶのであろう)がつく。屋蓋部の凹凸は、中心部より、隅部の建物装飾の方が、大きい。

身舎部は、5本の柱形で四分割され、側背面は凸型に突出し、建物装飾で飾る点は、金塔 (Thap Pou Loc) と近似した様式を取るが、隅の部分に石材を挿入し、その表面を円に近いS字型の連続花葉文様を彫りこむ。また、屋蓋部と身舎部の間の繰り型(軒下コー

ニス)にも、隅部では石材を挿入している。この様に隅部に石材を挿入する例は他に例を見ない。側背面の突出部の建物彫刻は表面がかなり崩壊しているが、全体的なプロポーションを見る限り、金塔に近似した装飾パターンで彩られていたのであろう。基段は、残念ながら殆ど崩壊しており、当初の形状は不明である。しかしながら、何ヵ所かに石材が残されており、当初は、周囲を装飾のなされた石材が覆っていたのかもしれない。また、身舎中心部の突起部や、基段上端部などのレンガの中に、方形の砂岩が埋め込まれている。これはおそらく、建物表面を彩っていた砂岩の装飾材を構造的に支える為に挿入された材であった可能性が高い。塔の内部には5～6m程の高さまで、レンガが削り取られている。上層まで、綺麗にせり出されたレンガ積みが見られる。

## 2-11. トゥティエン (Thu Thien) 遺跡【ビンディン遺跡群】

トゥティエン (Thu Thien) 遺跡 (13世紀初頭、重枝) は、平坦地に建つ遺跡で、周囲は畑に覆われている。立面ファサードは、まず、屋蓋部は、銅塔、金塔に見られるように、中心部の凸型の突出より、隅部の隅尖塔の方が大きく、隅が強調される。幸いな事に、北西隅の建物装飾がほぼ、完全な形で残されている。この隅尖塔は、殆ど水平なラインで構成され、それが上部へ行くに従って低減する形状を持ち、Mi Sonなどでみられる建物装飾の縦と横のラインで構成されるデザインや、ポー・クロン・ガライ、ポー・ロメなど、もう少し南部で見られる様な、玉葱型をしたデザインとはかなり趣を異にする。身舎部は、金塔、銅塔などの装飾パターンと近似したものと言えよう。基段は崩壊が激しく、殆ど原型を留めない。

内部は方形で、がらんどろでなにも無い。しかしながら、ここでも興味深い点は、正面の壁面に、石造の彫像が壁面の装飾として挿入されていた点である。残念ながら、それら堂内を彩っていた石彫群は、ヴェトナム戦争の時代に盗難に遭い、何処かへ持ち運ばれてしまったとの事である。現状では、そこに、石彫がはめ込まれていた痕跡のみが痛々しく残され、往時の姿を想起させるのみである。この塔の入り口では、開口部を確保するためにレンガをせり出しているが、せり出しの頂部までの高さは通常よりかなり高い。また、この入り口上部には、石材の楣石が、あたかも独立する様に挿入されている。恐らく当初は、数枚の石材で開口部周辺を飾っていたのであろうが、現在はこの楣石が一材、挿入されているのみである。

建物は、近年、補修作業が行われ、モルタルの目地で施されたレンガが腰まわりに挿入されている。同様の補修作業を金塔でも見かけた。しかし、銀塔やフンタンで行われている修復作業では、レンガを1枚1枚、刷り合わせて行う精緻で、丹念な修復作業が行われている。これら違った手法の修復作業が同じ区域で行われている事を勘案すると、このモルタル目地を施したレンガによる修復は、将来に向けての、本格的な修復作業までの応急処置 (とはいっても10年～20年はこのままであるであろう) の様にも思われる。(また、ちょうど25cm程、レンガ1枚分、オリジナルな壁面よりも奥でレンガの積み上げが取められているところをみると、この上に擦り合わせた精緻なレンガを将来、積む予定にでもしているののだろうか。)

## 2-12. 象牙塔 (Duong Lon<sup>9</sup>、ユンロン) 【ビンディン遺跡群】

次にトゥティエン (Thu Thien) 塔の北側に位置する象牙塔 (Duong Long, ユンロン、12世紀末～13世紀初頭、重枝) へと向かう。同塔は、中央の最も大きな塔を中心として、両脇に塔が並び、合計3基の塔が建つ。この建物全体的なプロポーションは、チャンパ

建築特有の身舎部が縦長の形状を持つが、この塔の身舎部の立面パターンは、柱形による分割ではなく、11～12世紀以降のクメール建築にみられる様に、中心部向かって後段かに突出を繰り返し、交互に折れ曲がった縦のラインで立面が構成されている点にある。また、その中心部には石材で出来た突出部を設ける。

とりわけ、北塔の南壁面は、ほぼ完全な形で残されている。この突出部は、基段、身舎、妻面、そして、その上部にさらにもう1段、妻飾りがつく。上段の妻飾りは、ナーガの胴体を破風としており、そのナーガが内側へ廻り込む。残念ながら、そのナーガの中心にくる彫像は、削り取られたものか、風化したものか、全く読み取ることが出来ない。この上段妻飾りを受けるように両脇下端にも、ナーガが挿入されている。この上段妻飾りの下に位置する妻飾り、身舎、基段で構成された装飾は、今まで見てきたチャンパ建築の建物装飾とは全く趣を異にし、明らかにクメール建築的建築エレメントを感じさせる。如何せん、建物が縦長であるため、全体的な構図が、縦長であるが、上部中心にマカラ（かなり規模が大きい）を配し、そこより下へ向かってナーガの胴体の破風が用いられ、ナーガの頭部が外側へ向かって配される。また、その外側を火炎文様が2段にわたってみられるのもクメール建築特有のモチーフであるといえよう。

この妻面の中心にも神像が配されるが傷みが激しく不明である。ただ、頭部から上半身にかけてわずかに残された形状により、そこには座像が配されていた事が分かる。上部の妻面も全く中心部の図像を残さないが、全体的なプロポーションより、座像であった可能性もある。もし、その座像が仏陀の座像であったならば、同遺跡が仏教系寺院であった可能性もある。この身舎部、基段部は装飾が施されておらず未完成である。

最も残りの良い、中央塔の屋蓋部などは、10世紀後期に建立されたプリア・コーに見られる屋根の形状に相似する。ここでは、金塔、銅塔などで見られた隅尖塔は用いられなかったようである。仮に基壇が水平の繰り型のみで構成されていたならば、同建物のクメール建築の影響の濃さをさらに深めるが、基段の形状に関しては3基とも傷みが激しく不明である。

中央塔、北塔ともに、石材の開口部枠材が残されている。この塔自体も相当、規模が大きいですが、それに比して挿入されている石材の枠材もかなりの大きさである。内部には、壁龕等、目立った装飾は見られないが、壁面中心部に多少、窪みを持たせ、ちょっとしたアクセントとしている。堂内は5.5m四方と、今回見たチャンパ建築において、最大級の大きさを持つ。北側塔の入り口は、小さな前室の様な空間が付加されていた様で、身舎上部の高さに、塔より前面部に向かって、繰り型の施された石材がみられる。全くといって良いほど崩壊している前室であるが、その収まりは、北、南とは多少、趣を異にしていた事を示す。

## 2-13.ビンラム (Binh Lam) 遺跡【ビンディン遺跡群】

ビンラム (Binh Lam) 遺跡 (11世紀、重枝) は、他の遺跡と違い、かなり建物の高さが低いのが特徴的である。また、屋蓋部は、中心部を凸型に突出させている。この突出部は、上部に妻飾りを付けた建物装飾で、プノン・クレンにあるに似た形式である。隅尖塔は見られないが、当初より無かったのか、それとも崩壊したのかは不明である。あつたとしても、さほど大きく無いものが付いていたほうがプロポーション的には綺麗であろうか。また、身舎部は柱形5本による四分割とし、中心部を突出させる。屋蓋部と身舎部の間は繰り型 (軒下コーニス) のところに花綱文様を用いているのが特徴的である。西側背面は残りも良く、火炎文様の妻飾りが美しく残る。内部は、傷みが激しく、新しいレンガで補

強がなされている。その他内部に関して、特徴的な点は見出せない。正面も傷みが激しく、殆ど当初の形式を残さず、開口部廻りもどの様な形式を取っていたのかを推測する資料を逸する。

基段も傷みが激しく不明。プロポーションが他のチャンパ建築と異なり、建ちが低い点が、クメール建築のレンガ造建築を見なれている私には、ちょうどフィットするプロポーションといえる。この遺跡は村落の中心にあり民家に取り込まれた様に建つが、村人以外は、訪れる人も殆ど無いのであろう。私が訪問した際には、興味深そうに周辺の村人が集まってきた。

#### 2-14.雁塔 (Thap Nhan、ニャン塔) 【ボー・ナガー遺跡群】

雁塔 (Thap Nhan、ニャン塔、11世紀、重枝)は、Thy Qua (トゥイホア)の街の北側の丘の上に位置し、国道1号線より、簡単に見つけることが出来る。丘の上に、1棟のみレンガ造の遺跡が残る。内部には、中心に据えられたヨニの上に、現代の神像(名称不明)が奉られており、現在も周囲の人々の信仰が篤い様である。神像の前面の祭壇には、供物がささげられ、線香がとる。このヨニは、達弁の施された繰り型の上下と、その間に、乳房をかたどった突起が施されている。年代的なものは不詳であるが塔建立時よりの当初の台座と考えられる。堂内には、幾つかの石材装飾が取められている。それらの内、北側に置かれた一打で出来た鏡板は、四臂のヴィシヌヌ神(持物に、円盤、蓮の花、三鈷杵。そして足元には水牛ナンディー)は彫り込まれており、この建物を飾る妻飾りであろう。その他、蓮蕾型で、多少、膨らみを持った建築装飾(アマカラ)もみられるが、これはおそらく、建物の隅尖塔の頂部に用いられていたものであろう。内部は、壁龕、隅部の突起等はみられない。近年、修復が行われた様子で、正面に用いられていたモルタルは取り払われ、擦り合わせのレンガにとってかわっている。また、開口部は当初の形状を残さない。

外形は、近年の修復作業のおかげかもしれないが、上部まで殆どの部分が残されている。塔は、身舎も含めると四層で構成されていた事が分かり、各層共に中心部には建物装飾を付け、隅部には隅尖塔を配す。この隅尖塔の形状は、5層より或る水平な層が上部へ行くに従い同比率で低減している。ボー・ロメなどにみられる玉葱形とは形状は異なり、また、銅塔に見られた様な形とも違う。この上部に、塔内部に収納されていた三角錐の石材が載せられていたものとおもわれるが、修復の際には、用いられなかったようである。身舎部は5本の柱形で四分割されており、中心部は凸型に突出して建物装飾が付く。この建物装飾は、殆ど崩壊し、どの様な形状のものであったかは不明であるが、その形状は、さほど大きなものではない。通常、隅部に見られる石材はここではみられず、石材の使用は極めて限られたものようである。基段は、八の字型に裾広がりにつくられているが、これは当初のものではなく、修復の際に用いられたものであろう。当初の形状は不明。プロポーションはそれほど、縦長ではない。

#### 2-15.ボー・ナガル (Thap PO Nagar) 遺跡 【ボー・ナガー遺跡群】

雁塔を後にして、一路、最終目的地である Nha Trang (ニャ・チャン)へ向う。この Nha Trang の街の北側 2 km のところに、ボー・ナガル (Thap PO Nagar) 遺跡へと向う。同遺跡は、中央塔の周囲に数基の建物が複合的に配された伽藍を形成する。

中央塔は主室と前室とに分かれる。その上、主室、前室で別々の屋根を持つ。横から見るとちょうど2つの塔が合体したかの様になる。中央塔正面の開口部廻りの収まりは非常

に興味深い。殆どのレンガ造建造物では、同部分は最も傷みが激しく、殆ど当初の形状を残さないが、ここでは残存状況もよい。入り口の両脇に 50 cm 角ほどの一材で出来た石柱が立ち。また、その柱頭、柱脚に方形の柱より一回り大きい石材を挿入している。この柱頭の石材の上に、楣石を組み、さらにその上に、ヴィシュヌ神の施された妻飾りの一材で出来た鏡板が入る。（このヴィシュヌ神の彫られた妻飾りの鏡板は、雁塔内部でも残されていたが、ひょっとすると、崩壊していて全く当初の形状を残さない、雁塔の正面部分も同じような開口部廻りの構造を持っていたのかもしれない。）この一打で出来た柱の表面には、びっしりと碑文が彫り込まれており、構造材としての柱である一方、碑文石としての役割をもっていた事が分かる。

中央塔の内部には、ヨニの上に、多臂の女神像ウマーが乗る。この仏像の背面には美しい火炎彫刻がみられる。この仏像の前面は現代ヴェトナム的な像で象られているが、それは、背後にあるオリジナルな像を覆い隠すように施されたものである。現在でも、数多くの人々（とりわけ女性）がこの像を慈母信仰の対象として礼拝に訪れる。この堂は、現存するチャンパ建築の中において、未だ当初の信仰対象物が息づく、稀有な例という事がいえる。

この祠堂の正面に付いている木造扉は、表面の風蝕具合をみてもかなり時代の古さを感じさせる。クメール建築、チャンパ建築、今までに数多くの建造物を見てきたが、管見する限り、アンコール・ワットの数ヶ所等を除き、木造扉が残っている寺院は数少ない。観音開きで、一枚板で出来た同木造扉が当初のものかどうかの判断は別として、傷みやすい木造部材が殆ど完形で残されているという事実は、この寺院が、絶える事なく、近隣の人々の信仰を集めてきた「証」であるといえる。建築的な美しさのみでなく、この寺院を強調すべき点は、例えばヒンドゥー教が途絶え、人々の宗教が仏教に変化しようとも、脈々と地域の重要な信仰対象物としての脈命を保ち続けてきた、という点にある。

中央塔の前の急な階段を降りたところには、入り側柱 1m40cm、側柱 1 m を超える八角形の柱列で出来た建物が建つ。入り側柱の側面には側柱の頂部に向けて挿入されていたと考えられる木造の繋ぎ梁の大入れ穴がある。残念ながら、同建物の屋根が木造であった痕跡はその程度しか残されていないし、また、このレンガの構築物の建立年代を示すような手がかりはない。しかし、この建物が、中央祠堂と同時期に建立されたのであれば、内部空間を持つ建造物として、重要な位置付けをしめる。ドンジュオン (Dong Duong) の第三寺苑でも、この様に多くの札にて構築された建物がみられたが、この建物も、機能的、構造的に同種の構築物だった可能性が高い。この構築物は、かなり修復がなされているが、建物の奥には、30 cm 程高められたテラスが設けられている。

### 3) チャンパ遺跡に秘められた特性

チャンパ王国の建築は年代的に 8 世紀～17 世紀とかなり幅を持った期間の間に建設されており、年代毎に装飾、建築様式は変遷する。それら詳細な様式、変遷研究は、Parmentier、Stern などのフランス人研究者により第二次大戦以前にはほぼ、現在見られる様式区分が完成しているといえよう。また、現在の遺跡の現況は、第二次対戦以降の戦乱により、完全に消滅した遺跡も多く、実存遺構を調査するには決して良い条件とは言い難い。

今回の短期間の調査においては、クメール建築との比較を念頭におきつつ、各遺構の特徴を出来るだけ把握する事を努めた。また、そのなかにおいて、心に留まる点として下記の 2 つの項目があげられる。

まず、用いられる主な建築材料が、時代的に 8 世紀～17 世紀とほぼ 1000 年近くに及ぶ

にも係わらず、レンガに終始する点が挙げられる。カンボジアのクメール建築においても、初期の建造物はレンガが主な建造物であるが、10世紀を境に石造(砂岩、ラテライト)が、主たる建築材料へと移行する。同変移は明快であり、10世紀以降、クメールにおいて主構築物をレンガ造で建立した建築は例外を除き消失する。この建築材料のレンガから砂岩への以降は、多少、地域差があるのかも知れず、タイでは11世紀においてもレンガ造の塔が建立されている。また、クメールにおいても、ごく稀に、屋蓋部をレンガとしたり、タ・プロム(12世紀後期～13世紀前期)の環濠外側の建造物にレンガを用いるなど、わずかにレンガ造の事例がみられるが、それらの建造物は例外的な構築物といえる。また、用いられる石材も、堆積岩である砂岩に固執する。プノン・クロムのように、火成岩の山上に建立される寺院でさえ、他所より砂岩を持ち運び、寺院を建立している。

一般的に、建築に用いられる材料は、その近傍より産出される材料を用いるのが通例である。たとえば、日本の木造建築は、日本の気候の中で木がふんだんに利用出来た事によるし、また、ギリシャのパルテノン神殿では、その近傍で産出された大理石が用いられた。

チャンパ建築の場合、その建設初期段階では、レンガという、部材の1スケールの規模が大きくなく、積み上げにあたり、それ程、堅牢な足場、重機を必要としないレンガが重宝された事も想像出来る。しかし、クイニョン周辺のクアンナム地方では、遺跡の近傍に良質の花崗岩が産出されており、現在、それらの石材を切り出す風景を数多く見かけ、直近に良質の石材を得る事も可能である。(もちろん、花崗岩という硬質の石材の加工には、高度な技術を要する事もたしかであるが……。)

チャンパ建築がレンガにこだわり続けた理由として、「大地を意味する「土」に生命をはぐくむ「水」を混ぜ、破壊と生命を象徴する「火」を加える事によって物質が変化し、神に捧げるための祠堂を造営する材料に変質することに、大きな宗数的意味を認めていたから」(重技)という一解釈が示されている。果たして、宗数的理由が厳然と1000年近くにわたり根付いていた結果と結論付ける事は可能であろうか。

2つ目の点として、文字、宗教などインドより多くの文化を受容したチャンパ王国であるが、建築に関していえば、今回、調査をした遺構をみる限り、インド建築の全くの模倣、と呼べる建築はなく、インドよりの文化を受容し、かつ、彼らなりに解釈を加え、みずからの建築文化を具現化したと考えるべきであろう。ただ、それらの遺構中において、象牙塔(ユンロン)に見られるクメール建築の深い影響や、フンタンの屋蓋部の形状の様に、明らかに南インド建築の影響を濃く受けたと考えられる要素がみられた点は非常に興味深い。これらの建造物の歴史的背景を解明出来れば、チャンパという、海のシルクロードの要衝に位置する王国の近隣諸国との関係がより明確となるように思われる。

## 5. まとめ(今後のヴェトナム文化遺産研究課題)

今回の調査は、実質10日間ほどの非常に短期な期間に、HueよりHO Chi Minhまでの1000km近くにわたる文化遺産を駆け足で見てまわったといえる。従って、調査というには程遠く、いわばヴェトナムの文化遺産に関する第一印象を得た、というのが率直な意見である。また、隣国カンボジアとの相似を感じる一方、その経済的な格差を感じ、ヴェトナム経済の発展の目覚ましさを肌で感じた。

文化遺産の修復作業に関しては、Hue、Hoi An等、木造建造物の修復は、長い戦争による維持管理の中断も影響がみられるかもしれないが、Hueの霊廟建築の腐朽の進行の度合いの激しさに、非常に驚かされた。Hueの貴重な歴史的建造物は、ことごとく抗仏戦争、ヴェトナム戦争により直接的にせよ、間接的にせよ被害を蒙っており、王宮の主要な建物

は、悉く消失する。また、これら内戦をくぐりぬけた建造物も、長い間の維持管理の不在により、木造部材の腐朽は激しく、一刻の猶予なく、解体修理が行われなければ、建物の消失へとつながる惨事となる事は明白であった。

レンガ造建築の修復に関しては、植民地時代（1900～1954）から、近年までモルタルなどを多用した軽微な補修が行われている（重枝、p.3）。また、Mi Son、Dong Duong など、50～60年代の戦争により、壊滅的な打撃を受けた建造物も数多い。しかし、その一方、ここ10年ほどの間に進められているレンガ造建築の修復作業は、目地にモルタルなどを用いず、レンガを刷り合わせる伝統的で、オリジナルに近い手法で修復作業が順次行われていた（雁塔、フンタンなど）。また、修復作業が近々に行えないような遺跡でも、身舎下部の傷みの激しいカ所に対し、応急的と思われるレンガを挿入する作業が行われていた（金塔、トゥーティエンなど）。特に、フンタンでは、レンガのみならず、基壇にかなり大きな規模の石材を挿入しており、その修復技術がかなり高い事が理解出来る。

最後に、今回のヴェトナム調査を通して得た所見として、今後のヴェトナム文化遺産研究に関して、下記の様な研究テーマを今後の研究課題として挙げておきたい。

#### 1) ヴェトナム木造建築の架構の研究（建築史研究）

日本の木造架構にみられる野屋根とは異なり、Hue、HoiAn などにある木造建築では、中国建築と同じく、化粧屋根裏として、軸組み自体に彫刻などを施した架構であった。これらヴェトナム木造建築の架構は多岐におよび、研究対象としては非常に興味深い点である。Hue の木造民家に関しては、昭和女子大の近年の HoiAn での修復作業に伴うヴェトナム木造建築に関する研究があるが、同研究は、未だ省みられない一般木造家屋、一般木造寺院研究をすすめてゆく上においても興味深い。

#### 2) チャンパ建築における多柱殿について（建築史研究）

今回、調査を行ったチャンパ建築のうち、Mi Son の B1 グループ、ポー・ナガル（PO Nagar）寺院、Dong Duong などでは、中央塔の前面に柱のみで構成された建物（多柱殿）が建つ。Dong Duong では、抗仏戦争、ヴェトナム戦争により、その所在さえも確認出来ないほど、破却されているが、この Dong Duong の多柱殿に関しては、インドのマダパ（Mandapa）、タイにおけるボート（Bot）との機能的関連が指摘されている（重枝、p.144）。ポー・ナガル寺院では入り側柱の長さが、側柱の長さより長く、また、入り側柱の側面より側柱の柱頭に向って、木造部材が挿入されていた長方形の穴を残す事より、この柱で出来た建物の上には、木造の架構が架けられていた事が分かる。この多柱殿は14世紀以降に建立されたと考えられている（重枝、p.174）。いずれにせよ、これら社で構成された建物の役割は、場内に安置された彫像に対し、礼拝の為の空間として用いられた事が想起出来る。

この様な、中央柱（伽藍）の前面部に柱で構成されて大きな内部空間を持つような（恒久的な建材で建てられた）建物は、クメール建築では、タ・プロム、プリア・カン、バンテアイ・クデイの前柱殿と呼ばれるバイヨン様式（12世紀後期）の建造物にしか見られない。チャンパの建築では、この中央塔（伽藍）の前面部に内部空間を持つような建物（多柱殿）が、10世紀頃と看做される建造物にみられる。この多柱殿が果たして10世紀ごろに出現していたかどうか。もし、そうだとすると、クメール建築と比較しても、時期的にかなり早い。同点は、アンコールの前柱殿の出現を考える上においても、重要な示唆を与えてくれるものと思われる。

### 3) チャンパ建築に見られる歴史的背景について（建築史研究）

インド建築は、「全体的な見取り図から出発するのではなく、部分の集積が全体をつくり、目的地へ至るということ、それがインド人の空間感覚であり歴史感覚であるように思われる」（神谷武夫「インド建築案内」p.15）と表現される。インド建築と一言でいっても、広大な国土に、膨大な数の歴史的建造物が、各種違った王朝により建設されており、それを定義づける事は容易でない。チャンパ建築においても、象牙塔（ウンロン）に見られるクメール建築の深い影響や、フンタンの屋蓋部の形状の様に、明らかに南インド建築の影響を濃く受けたと考えられる要素等、突然変異の様に、一塔のみ、他の建築文化の影響を色濃く示す建造物がみられた。このような建造物をどの様にチャンパ史のなかで位置づけるか。また、その捉え方を通して、当時のチャンパという国の局地的な対外接触を暗示出来ないであろうか。

890年頃、チャムはアンコール朝に対し攻撃を仕掛けたとされ、その頃、チャンパの工人と建築技術により、プノン・クレンに所在するプラサート・ダムレイ・クラップ（Prasat Damrei Krap）が建設されたとされる（重技、p.17、p.28、千原、p.207）。その為、プラサート・ダムレイ・クラップの建築様式がチャンパ建築様式にて建立されているとするが、真偽の程はどうであろう。

### 4) ヴェトナム文化遺産の修復コンセプトについて（修復・保存史研究）

フエの阮朝王宮内、世廟は1990年代後半、ポーランド政府との協力の下、修復がなされ、概観する限り、解体修理は必要なところのみの部分解体である。その一方、ミンマン（Minh Man、明命）帝廟の右従寺は、1997年にトヨタ財団の基金を用いて修理された建物で、日本の木造建築の修復技法が随所に用いられ、建物を全解体し、腐朽部分を継ぐ事により、当初材を出来るだけ再利用している。また同じく、ミンマン（Minh Man、明命）帝廟内の主殿（崇恩殿）ならびに明楼の場合は、殆ど新築に近く修復がされているか、もしくは新築である。もし、それがヴェトナム自らの修復技法であるならば、ヴェトナムの文化財修復技法が、かなり新築に近い状態にまで修復する事を要求する事を感じさせる。

カンボジアの例と同じく、ヴェトナムにおいても数ヶ国により修復作業が展開されていた。しかし、カンボジアとヴェトナムの明らかな違いは、ヴェトナム自身が修復作業を行っている点である。また、その修復コンセプトは、Hueの木造建築の修復事例を見る限り、ヴェトナム自身の遣り方と海外修復チームの遣り方には、違いが感じられた。今後、ヴェトナム修復技術史の発展とその背景について勘案する必要性を感じた。

### 5) ヴェトナムの文化遺産行政について（修復・保存史研究）

Mi Sonへ来る途中でも、多くの橋の建設風景を見た。それも数百メートルにわたる長大な橋ばかりである。それを自国で行えるだけの国力があるヴェトナムに、カンボジアとの経済的格差を感じる。まだ、この国は援助に頼らなくとも自国の経済的な発展で、かなりの開発が行える可能性を秘めている様に思われる。しかしながら、その一方、文化財行政に目を転ざると、Danangのチャム彫刻博物館の展示物、展示方法はプノンベンの国立博物館と大差無く、この国の文化行政に対する貧しさを垣間見た気もした。表層的にみれば、ヴェトナム政府の執行する文化行政にたいする優先権の低さを感じた。ヴェトナムの文化遺産行政について考慮する事は、同国の文化遺産の保存事業に密接に影響を与える問題であるといえよう。

## 6) ヴェトナムの復元建築について（修復・保存史研究）

フエの王宮内、大和殿を突き抜け、背面へと廻ると、そこには2棟の建物が両脇に残される。しかし残された建物はそれまでで、その背面は、空虚な空間が広がる。その荒れ果てた草の被い茂る空間に、時として建物の基段や、礎石が顔を覗かせ、そこに往時、宮殿の建物があつた事が分かる。非常に残念であるが、それらの建物の殆ど全ては、1968年のヴェトナム戦争の際に破壊、破却されてしまったようである。そのような光景を目の辺りにするにつれ、遺跡の保護を訴えかける上で、もっとも重大な破壊要因は人的被害である事を痛感する。

その廢墟を抜け、王宮の西隅にある長生殿 (Dien Tho) へと向う。この長生殿は、近年、再建されたものである事は明らかである。他に廢墟以外、見るものが無い、この王宮内においては、往時の建築を偲ぶ、重要な建物となっているといえよう。近年、日本の朱雀門の復元工事に見られるように、過去に完全に破却された建造物の復元建築は、新たな段階を迎えているといえるかもしれない。そのような中、「復元」というある一種、新築であるにもかかわらず、材料的にまったく新しい、伝統建築が今後、現代社会においてどのような位置付けを持つのか、非常に興味深いものがある。

確かに、この長生殿のように、全く新築であったとしても、訪問する人々に対してヴィジュアルで、視覚的効果をもたらすという観点からすると、かなり強い影響力をもたらす事は間違いない。今回の Hue の王宮の探訪を通して得た印象は、少なからず、日本における朱雀門、大極殿の復原工事の必要性を多少なりとも感じえた。

しかし、これら新しく「復元」という名の下に建設された建築は、どの様に歴史的文脈の中に位置付けられるのであろうか。それとも、ただ、単に観光的資源として、ひととき脚光を浴び、その後、逼塞へと向うのであろうか。また、長崎のハウステンボスや、伊勢のスペイン村の例に見られる様に、建築コンセプトは他国の伝統・歴史建築であるが、そこに再現されるすべての建築は新築で、かつ、日本の文化とは異質の文化を事業ベースで取り入れようとした、テーマ、話題性の建築は、果たしてどの程度の寿命を保ちえるのであろうか。（実際、94年に成り物入りで開園したハウステンボスは、2003年2月26日付けで、2289億円の負債を抱え、会社更正法の適用を受け、事実上、倒産した。）

ディズニーランドに見られる、無限性の変化、夢の探求は、東京ディズニーランドが開園して20年近く経つにも係わらず、未だ人々を惹きつける。歴史的建造物の持つ、普遍性とは裏腹に、社会の変動は激しい。息づく歴史的遺産、受け継がれる文化遺産に求められる要素は、いったい、どのような要素なのであろうか。いずれにしても、その中で絶対的に必要な要素は、そこに息づく人々の街に対する愛着であろう。

ヴェトナムの人々にとって、建物を一から新しく建て直すというコンセプトは、歴史的に、また文化遺産の価値としてどのように位置づけられるのであろうか。

## 7) 文化遺産を取り囲む周辺環境の変化（文化遺産環境調査）

フエのティエンムー (Chua Thien Mu、天姥) 寺で見られたように、観光地であるこの寺院は、この塔の背地に、仏教寺院が存在し、寺観も整備され、境内も清掃が行き届き、寺院としての機能を、厳然と持ちつつ息づいている事を窺わせる。その一方、フエにある多くの霊廟は、皇帝の霊廟としての神秘的、かつ威厳性を消失し、ただ、単に観光地としての側面が強い。同じフエにありつつ、文化遺産の対象物自体の機能の変化により、対象物、そしてその周辺環境は非常に異なることが理解出来る。

建物の機能的、象徴的意味が、いかにその周辺環境を醸し出し、変化を与えているかを

考慮する事は、その文化遺産を考慮することのみならず、周辺地域の人々と文化遺産のかかわりを浮かび上がらせる事になる。

〔参考文献〕

- 千原大五郎、『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』（鹿島出版会、1982年、321p.）
- 重枝 豊、『チャンパ王国の宗教建築における建築技術に関する史的研究』（日本大学学位請求論文、1998年、321p.）
- チャンパ王国の遺跡と文化展実行委員会、『チャンパ王国の遺跡と文化』（財団法人トヨタ財団、1994年、116p.）
- 昭和女子大国際文化研究所編、『Hoian』（2000年、48p.）
- 『世界遺産辞典—関連用語と情報源—』（シンクタンクせとうち総合研究機構、1997、127p.）
- 『（新訂増補）東南アジアを知る辞典』（平凡社、1999、543p.）
- 『地球の歩き方、ベトナム』（ダイヤモンド・ビック社、2002年、354p.）
- STERN Philippe, « *L'art du Champa et son évolution* », Études et documents d'art et d'archéologie – Tome III, Adrien-Maisonneuve, 1942, 122p.
- PARMENTIER Henri, « *L'art architectural hindou dans l'inde et en Extrême-Orient* », Vanoest, 1948, 249p.
- Lê Thành Khôi, « *Histoire du Vietnam - des origines à 1858* », Sudestasia, 1982, 452p.
- VANDERMEERSCH Léon et DUCREST Jean-Pierre, « *Le musée de sculpture Cam de Da Nang* », Édition de l'AFAO, Paris, 1997, 205p.
- « *Vietnam Handbook* », Footprint Handbooks, third edit., Bath, 2002, 456p.